

原著論文

## 書生時代の小川正孝

久松 洋二\*

Masataka Ogawa of the Student Period

HISAMATSU Yoji

**Abstract** : We investigated the life of school days of chemist Masataka Ogawa from Ehime in Japan that was a pioneer discoverer of rhenium. Preceding studies of Ogawa's life of school days in Tokyo include several questions and unnatural points. We picked out the description of Ogawa from documents or annual reports of Tokyo University in the Meiji period and analyzed them about his college life, which didn't become clear so far. We introduce documents discovered newly in this report and reconstituted them consistently for chronological order with known episodes so far.

**キーワード** : 共立学校, 東京大学予備門, 東京大学法理文三学部, 帝国大学, 東京大学文書資料, 常盤会奨学金, 賃費生

**Key words** : Kyoritsu school / Preparatory school of the university of Tokyo / The departments law, science, and literature of Tokyo university / Tokyo imperial university / documents, Archives of Tokyo university / Tokiwakai scholarship / scholar

### はじめに

明治期から昭和初頭まで活躍した愛媛県出身の化学者小川正孝は、レニウム元素の先駆的発見者として現在では評価されている。2016年に命名されたアジア初となる周期表掲載元素ニホニウムにも、小川の前駆的な仕事に対する評価が込められている<sup>1)</sup>。ただ、小川の新元素ニッポニウムの発見は、彼の存命中を含む20世紀において長く懐疑的に捉えられていた。1996年、吉原賢二は現在の視点から小川の業績を詳細に分析し、小川が報告した新元素ニッポニウムはレニウムであり、その仕事はアジア初の新元素発見であったことを明らかにした<sup>2)</sup>。吉原の報告直後、小川の遺族からレニウム発見の物証が提出され、その分析<sup>3,4)</sup>によって小川の発見は確固たるものとなり、現在では周期表に名前こそ残せなかったものの、新元素発見に先駆的な業績を上げた科学者として、名誉の回復と評価がなされている<sup>5,6)</sup>。同時に、吉原は小川正孝の生涯について詳細な調査を行い、小川が歩んだ人生も明らかにした<sup>7-9)</sup>。また、吉原の調査の愛媛における協力者でもあった水関秀雄は、愛媛県内において小川の実績や生涯について詳細にまとめ<sup>10)</sup>、小川が過ごした時代や同じ時代を生きた人物が与えた影響

について深く考察した。

化学者小川正孝の業績は科学的な分析によって確固たる評価がなされたが、一方、小川の歩んだ人生については明らかになっていない点が多い。自身の生涯について文章にまとめて発表することをしなかったため、小川本人の言葉を元にその人生をたどることはできない。現存するものは、小川が家族や教え子達に語った昔話やその者達が伝え聞いた情報を後年書き記したもののだけである。幸いにも小川の教え子達は大変興味深いエピソードを数多く書き残しており、小川の人生が波乱に満ちたものだったことは、吉原や水関によって明らかにされている<sup>7-10)</sup>。このような事情から、小川の人生についてあまりエピソードが残っていない時期も存在する。例えば、小川が東京で学生生活を送る、いわゆる書生時代などもそうである。苦学した小川は旧松山藩の育英資金で勉学に励むエピソードが残っているが、その需給時期は帝国大学在籍時期と重ならない。小川の学生時代を支えた学資が不明な点など、伝えられているエピソードだけで学生時代をたどるには、少し資料に乏しい状況であった。

今回、小川が学生時代に当たる明治10から20年代について当館で資料調査を行ったところ、東京大学の文書資料を中心に明治期の資料の中に小川正孝の名前を多く

\* 愛媛県総合科学博物館 学芸課 科学・産業研究グループ  
Curatorial Division, Ehime Prefectural Science Museum

見つけることができた。今まで時期や事項に曖昧さがあったエピソードのいくつかの詳細は、これら資料で明らかになることがわかり、新しい資料を加えて、小川の東京生活を整理することが可能となった。

本稿では、小川正孝が上京して学生生活を送った明治14年から23年までの一時期について、文書資料を中心に当時の高等教育機関の状況を分析しながら、小川の置かれた教育や当時の生活環境と既知のエピソードとの関連性を考察し、小川の過ごした書生時代を再構成したい。

### 上京から予備門入学まで

#### 明治14年から15年まで（小川正孝16～17歳）

#### 上京の経緯

愛媛県立松山中学校の四級まで首席で通した小川正孝は明治14年に遊学のため上京する。当時、松山中学では十級から一級にわたる半年ごとの学期制であり、昇級を卒業と呼ぶ慣習があった<sup>11)</sup>。多くの生徒は期が変わる2月と7月に、より高等教育機関を目指して松山を離れた。松山を離れた生徒は中退と扱われず、その期に松山中学から輩出された生徒として扱われた。明治23年、松山中学校が明治19年の中学校令と災害復興費による県財政の非常事態により県公立中学校が全て廃止された関係で私立伊豫尋常中学校となり<sup>12)</sup>、その第一期卒業生7名が名簿に登場する初めての卒業生<sup>13)</sup>となる。それまでは松山中学を離れた者は中学輩出であり、小川正孝は明治14年7月輩出と扱われている<sup>14)</sup>。小川の上京した時期は明治14年7月輩出以降とされるのみだったが、嶽陽名士傳<sup>15)</sup>によって明治14年9月と特定され、上京には友人が同行したことも明らかになった。

当時の高等教育機関の入学選抜には、年齢と試験合格が条件で学歴は修学履歴の報告だけで入学条件に含まれていないため<sup>16)</sup>、地方の中学を中退して上京、受験する者も多かった。小川は、夏期休暇で松山に帰省していた東京大学在学の友人に東京遊学を相談し、9月その友人と一緒に上京<sup>15)</sup>する。生まれこそは江戸芝三田であるが、明治維新直後わずか3歳で松山に引き上げ、松山で育った<sup>7,10)</sup>小川にとって、自身の記憶では初めての東京と言える。汽船などの乗り継ぎと長い旅程を新橋駅まで同行してくれた友人の存在はどれほど心強かったかが推察できる。

明治14年頃における松山から東京への標準的な旅程は汽船と鉄道とを乗り継ぐルートであった。瀬戸内海、九州を運行する各社の汽船で三津浜港から神戸まで移動し、その後、郵便汽船三菱会社の汽船に乗り換えて神戸から横浜まで移動、最後に横浜から新橋まで鉄道で移動して東京に到着する。西南戦争がきっかけで海運業に進出する者が増えたおかげで瀬戸内航路は大激戦航路と

なり、三津浜港にも毎日数隻の汽船が寄港していた<sup>17)</sup>。汽船を使うと三津浜港から神戸まで1日<sup>18)</sup>で移動できた。明治6年の記録によると大阪三津浜間の運賃は上等4円、中等3円、下等2円50銭<sup>19)</sup>。明治14年における運賃もおおよそ同じと考えられる。また神戸横浜間は明治14年の記録で年間95便就航<sup>20)</sup>していたので、月8便つまりほぼ毎週1往復のペースの就航だった。神戸横浜間の所要時間は約3日、運賃は上等20円、中等9円、下等6円<sup>20)</sup>（下等は7円の時期もあった）だった。横浜新橋間の鉄道移動は約35分。1日12往復運行され、旅客運賃は上等1円、中等60銭、下等30銭<sup>21)</sup>だった。明治16年に発足する旧松山藩主による在京旧松山藩子弟への奨学制度、常盤会規則によると、東京から松山へ帰郷する生徒への支給額が10円<sup>22)</sup>だった。これは船、鉄道による運賃実費程度だったことが分かる。松山から東京までの旅程は、乗り継ぎが良くても3、4日かかるため、その間の食費等経費も当然必要となる。早くに父親を亡くし松山藩からの少ない公債で生活していた小川家<sup>7,10)</sup>にとって、正孝の上京は大変な負担だったに違いない。

小川の上京に同行した友人は、明治14年の夏秋に東大在学の条件から名簿で絞り込むことができる。当時でも東大中途退学者は少なからずいたことを勘案して、明治13年名簿<sup>23,24)</sup>に第一から三年級で掲載され、明治14年名簿<sup>25)</sup>には第二から四年級で名を連ねている、もしくは明治13年に四年級で14年名簿に再度四年もしくは撰科である愛媛県出身者をリストアップする。候補者は明治13年名簿で法学部第三級の三崎亀之助、理学部化学科第三級の橋柄三郎、文学部第一科第二年度の穂積八束と前川亀次郎に絞られる。このうち三崎は丸亀出身(明治9年から21年まで香川県は愛媛県に合併していた)、穂積は宇和島出身であるため松山出身の小川と接点がないとして除外すると、橋、前川が小川上京の同行者候補となる。2人の出身地の詳細は不明である。もし、友人が橋であれば、将来化学者として進む小川の進路に何らかの影響があった可能性も考えられる。橋の2級上級の化学科研究科在籍の甲賀宣政、吉田彦六郎は、明治11年に創立した化学会(後の東京化学会)の創立メンバー<sup>26)</sup>でもあった<sup>\*1)</sup>。橋は化学科卒業後の明治15年に死亡<sup>27,28)</sup>する。前川は明治16年に新潟へ任用<sup>29)</sup>される。

もう一つの可能性として東京大学医学部の学生も考えられ、当時の名簿から小川と接点がある学生1名の存在が認められる。明治7年に14歳以上が就学する伝習所(後の師範学校)が設置され、その第一席(最上級生)には14歳の大西克孝<sup>30)</sup>がいた。勝山小学校は同年、伝習所の付属小学校となり、小川は9歳で勝山小学校本課に編入する。もともと勝山学校課外席から分離した伝習所は勝山小学校と同じ敷地内にあったので、2人に面識

があった可能性も高い。明治14年の夏、大西克孝は東京大学医学二等予科生<sup>31)</sup>であり、秋には医学一等予科に進級<sup>32)</sup>する。明治14年は医学部予科が予備門に編入する前であったので、東京大学医学部独自の予科であり、予科生であっても東京大学の医学生と扱われていても不思議でない。橘、前川、大西が小川の上京に同行した友人の候補者であるが、現状ではこれ以上決め手となる資料はない。小川との年齢差は7～8歳と5歳であり、彼らが松山を離れたころの小川は年齢的にまだ幼い。彼らが郷里に帰った時に土産話を聞きながら親交を深めたのだと想像できる。

新橋で友人と別れた正孝がまず向かったのは日本橋浜町の久松邸<sup>15)</sup>だった。旧松山藩主久松家は、学業を修めるために上京した旧藩士子弟に邸内の長屋を住居として無償で提供していた<sup>33)</sup>。上京直後の小川にはもはや儉約が必要で、住居は旧藩主をお願いする必要がある。家族から正孝に許された学資はわずか月2円<sup>15)</sup>。今後の授業料の支払いなどを考えても、かなり切り詰めた生活をしなければならなかった。当時の物価の例を表1に記す。

久松家が書生たちに提供していた長屋部屋については正岡子規の記述に詳しい<sup>34)</sup>。邸中に南北に並ぶ長屋で、入口は東に面し、西には格子がはめられた高窓だけがあった。間口は2間(約3.6m)、奥行きは4間(約7.2m)で、部屋が二間と一坪の台所が備わっていた。図1にある明治17年発行の五千分一東京図測量原図<sup>34)</sup>には、久松邸内の建物が詳細に描かれている。図によると、当該長屋は邸内西端の川沿いに配置されていたことが分かる。

上京翌日に自炊用の鍋を買い<sup>15)</sup>、16歳の小川少年の東京での新生活は久松邸内の書生部屋から始まった。小川の入居時に何人の先輩が入居していたかは不明だが、子規もそうであったように、早い時期に小川もこの部屋を出ることになったことがその後のエピソードから推測される。

## 共立学校

住む場所が決まった小川は次に学校探しを行った。東京大学を目指すにはまず東京大学予備門に入学する必要がある。しかし地方中学を中途退学して上京した者にとって予備門入学は難関で、別の学校に通って予備門合格の学力を蓄えるのが普通だった。特に地方出身者にとって英語力不足は深刻で、初等中学科、高等中学科を卒業しても英語力が不十分で東京大学への入学が認められない者が続出した。そのため明治16年、予備門において英語学専修課が開設され、英語以外の科目で入学試験に合格した者を英語専修生として1年間予備門で英語教育を行い、予備門本校2級以上あるいは東京大学法理文三学部に進級させる措置<sup>36, 37)</sup>が講じられた。当時の

小川も自分の英語力が不十分であることを自覚していた。そんな小川が選んだ学校は神田区淡路町にある共立学校<sup>15)</sup>だった。(図2)共立学校は予備門入学のための専門校であり、この学校で1年間予備門受験のための学力を蓄えることにした。

共立学校<sup>38)</sup>は、明治5年の開学以来英語教育に注力し、東京英語学校や海軍兵学校へ進学する者を多く輩出した。しかし明治9年から10年にかけての西南戦争とコレラ蔓延で廃校寸前にまで追いやられる。学校再建のため、共立学校は予備門教授の高橋是清を校長に迎え、学制を改め、予備門に入学する準備教育学校として生まれ変わった。小川の入学するころはその実績が出始めた時期だった。

明治14年の予備門は生徒の自然法則を読み解く力の低下が問題視され、それによる国内の理系研究力の低下が危惧されていた。そこで同年8月に学科教程を改定して第四級が廃止され、四学年制から三学年制に変更された<sup>39)</sup>。それを受けて同8月、共立学校は従来の英語、算術に加え代数学、幾何学の4教科に履修学科を増やし、予備門第四級から第三級への入学準備へと速やかに教程を改正<sup>40)</sup>した。開けて明治15年2月にはさらに西洋歴史と西洋地理の2教科を追加する。当時は短い期間に学制や教程の変更が繰り返される時期でもあった。

当時の共立学校には英語学科と和漢学科の2学科があり、修業年限は2年と定められていた<sup>41)</sup>。英語学科は半年を1期として2年4期とし、和漢学科は期を定めなかった。階級を4等に分け、毎年2月、7月に定期試験をして進級を判定し、臨時の昇降も認められていた。試験ではなく学業履歴書の提出で入学が許可され、その後の学力検査により階級が決められた。授業料は英語科で一月1円、和漢科で25銭。卒業試験制度がなく、予備門に入学する者をもって卒業生とみなしていた<sup>42)</sup>ため1年で卒業することも可能だった。小川正孝も1年で共立学校を卒業することとなった。

実家からの仕送りの半額が授業料に消える。共立学校入学後しばらくすると、小川は学校が終わって夕方帰宅後に筆耕(本の筆写)のアルバイトを始めた<sup>43)</sup>。就寝時間が夜中の1時2時になったとのことなので、アルバイトと勉学に励んでいた生活がうかがえる。嶽陽名士傳には、周りの友人から暖かい援助もあって、食費や身の回りの品への支出を切り詰めながら学問に励み懸命に生活していた小川の当時の生活が記されているが、その中におかゆだけで生活していた記述がある。この部分については、後年遺族が誤りだと指摘している。記者が静岡の小川宅に取材にきたとき、ちょうどお腹を壊しておかゆを食べていたことがあの記述を生んだとのこと、小川の妻組緒が息子に話したエピソードとして残っている<sup>44)</sup>。

前述のとおり、英語力の不足は小川本人も実感していた。本人による記述は残っていないが、後年、学生に話していた笑い話の思い出を小川の教え子でもあった青山新一が書き残している<sup>45,46)</sup>。小川は自分の英語力不足を解消しようと、予備門入学前の一時期、英国人から持ちかけられた同居話をのんで、100日ほどその英国人と同居していた。家の手伝いをする代わりに語学を教わる約束だったにもかかわらず、酒癖の悪い英国人にいいように振り回され、最後には語学勉強どころか酒の手配や暴力まで振られるようになり、若干16歳の若き小川少年はその英国人が寝ている間に引越しを断行するという苦い経験をする。後年、このエピソードを手振り面白く笑い話にしてよく話していたとのことなので、この東京での洗礼を経験として自身でうまく昇華させられたようである。英国人との同居の失敗談が予備門入学前ということで、小川が久松邸書生部屋を出るおおよその時期が推測される。書生部屋で寒さに凍えた回想<sup>47)</sup>から冬の間はまだ書生部屋にいた。予備門の受験が明治15年6月でそれまでに100日ほどの英国人との同居生活が挟まれるので、明治15年春、約半年間で久松邸を出た計算となる。

東京大学予備門の入学条件<sup>48)</sup>は表2のとおり、年齢14歳以上かつ入学試験への合格である。明治15年の定期入学試験は6月12日から20日の間<sup>49)</sup>に行われた。試験範囲は釈解(万国史、英国史、第4読本の類)、文法(字学、解剖)、算術(終わりまで)、代数(一次方程式終わりまで)、幾何(ロビンソン幾何第3巻の終わりまで)、地理(総体大意)、和漢文(日本外史)でこの範囲から出題される。主だった教科は英語と数学だが地理や歴史もあって試験範囲は広く、共立学校1年間の学習では受験範囲全ての学習は難しかった。数学は予備門の試験範囲まで学習が間に合わなかったので、小川は受験の一週間前に公式を丸暗記して試験に臨んだ<sup>50)</sup>とのエピソードが残っている。それでも見事試験に合格し、明治15年9月、小川正孝は東京大学予備門の第一年(第三級)に入学する。この年、小川と同じく共立学校から東京大学予備門の第三級に入学したのは75名に上った<sup>51)</sup>。予備門入学試業状況<sup>52)</sup>によると、明治15年度は定期入学試業を含んで計3回の入試が行われ、102名が第三級に合格したので、実に75%が共立学校からの入学生になる。驚異的な入学率といえる。

### 東京大学予備門

#### 明治15年から明治18年(小川正孝17歳から20歳)

#### 予備門での進級と成績

東京大学予備門は9月に新学期が始まり7月で学年が終わる年度構成であり、予備門本<sup>こ</sup>本<sup>う</sup>での小川正孝の学生

生活は、明治15年9月11日にスタートする。明治15年は医学部予科が東京大学予備門に統一され本<sup>こ</sup>本<sup>う</sup>と分<sup>こ</sup>分<sup>う</sup>が設立する年でもあり、本<sup>こ</sup>本<sup>う</sup>が東京大学法理文三学部への進学、分<sup>こ</sup>分<sup>う</sup>が同医学部への進学コースとなった<sup>53)</sup>。予備門第一年次を第三級と呼び、最高学年の三年次を第一級と呼ぶ。本<sup>こ</sup>本<sup>う</sup>第一級を卒業すれば東京大学法理文三学部のいずれかの学部への入学が認められた。明治15年の第三級は5クラス総勢157名。小川正孝は第三級二ノ組<sup>54)</sup>に属した。(図3)同じ組に池田菊苗もいた。これ以降、小川は大学院を辞めるまで池田といつもクラスをともにする<sup>52)</sup>。ちなみに当時の大学は成績順で席が決まる、いわゆる席次が採用されていたが、予備門の組分けは席次ではなく便宜上の分類で各組同等<sup>55)</sup>であった。

小川が上京し遊学を始めた時期は明治政府の教育政策のターニングポイントで、開明主義から儒教主義へ、知育中心から徳育重視主義への転換が進められていた。予備門入学の明治15年9月に本<sup>こ</sup>本<sup>う</sup>教科が改定され和漢文科が充実<sup>56)</sup>する。また、第二級に記簿法、第一級に物理、化学、理財学が大学から降りて課目に加わった。化学が予備門の講義に降りてきたことは小川にとっては喜ばしい改定だったに違いない。化学の教科書はエリオット、ストレルによる化学初歩を使い、第一級の二、三学期に講義が行われた<sup>57)</sup>。化学の講義では、前日に出した課題の試験を行って生徒の習熟度をはかりながら講義を行うとともに、種々の実験を実施した。当時の化学講義は、教室内で座学の途中に実験を見せるスタイルが主流であり、予備門でも講義に加えて種々の実験を示すと強化細目にも記載されている。予備門の教科は表3にまとめる。

予備門での成績は学期ごとの試験と日常の成績、学年末の試験の成績から課目評点として100点満点の点数で評価された。全課目の評点平均値で学内順位が決まり、評点平均と各課目の合否数によって昇級、降級、退学が判定された。判定時期は各学期、学年ごとにあり、大変厳しいものだった。成績の判定については表4にまとめる。履修科目全てが必修なので、生徒は全ての教科について満遍なく良い成績を保つ必要があった。東京大学文書館の資料<sup>58)</sup>を元に小川の在籍した期間の予備門全生徒の退学者数をグラフ(図4)にまとめる。全学年のデータとはいえほぼ毎月退学者を出しているのは驚くべきことで、予備門の過酷さをよく表している。退学者の多くは表向き疾病や事故による退学とされていたが、その実は学業不振と推察されている<sup>59)</sup>。

明治15年に5組157名いた第三級からの小川の同級生の昇級を予備門一覧<sup>60,61)</sup>、試験成績表<sup>62)</sup>、卒業生名簿<sup>63)</sup>から追跡する(表5)と、翌年の明治16年に無事第二級に進級できた者は49名。全体のわずか3分の1程度しか1年で進級していない。前年の落第者も加えて第

二級は3組55名となり三級から組数生徒数とも激減する。その中で、明治17年に第一級へ進級し翌明治18年7月に卒業できた同級生は32名。この年の本費卒業生が73名なので半分は前年度留年組からの卒業という計算になる。このように予備門を三年で卒業するのは大変難しく、小川と同期入学102名のうち三年で卒業する割合は31%にすぎない。予備門では各学期、学年の厳しい判定で進級や降級、退学が決まるだけでなく、二年以上同じ級に留まると退学しなければならず、明治15年の第三級157名のうち、名簿から姿を消した者は約半数の74名に上る。退学した者のその後の詳細は不明なことが多いが、他省管轄の専門教育機関である工部大学校や駒場農学校等の在学名簿を調べると、4分の1ほど予備門経験者を見いだせた<sup>64)</sup>。

このように厳しい就学環境の中、小川正孝は明治16年9月に二級三ノ組17名のクラスに池田とともに進級し、明治18年7月、見事三年で卒業<sup>65)</sup>を果たし、理科志望20名の一人として晴れて東京大学理学部へ進学する。(図5)

予備門時代の小川の成績を知る資料<sup>62)</sup>が残っている。明治17年12月に予備門で実施された試験成績表(図6)で、第一級の第一学期の成績表にあたる。席次23番に小川正孝の名前がある。成績を書き記してみると、修身学80.0点、和漢学70.5点、英文学76.0点、語解73.0点、代数学87.0点、三角法58.0点、物理学77.5点、動物学82.5点、画学66.0点、体操74.8点、総得点741.3点、平均点74.1点で及第、欠課、罰ともに無しである。各課目満点は100点、合格は60点以上である。今回の小川の成績は三角法だけ60点を下回っているが、学期の試験結果ならば全課目の平均値が60点以上あれば50点以上得点した不合格課目は3つまで無条件で及第判定であり、及第となった。たとえ最低点が50点を下回っても平常成績次第では及第とされる。この時の試験は第一級87名中、及第が76名、不合格が4名、欠席が5名であった。

### 予備門の給費制度と常盤会奨学金

東京大学予備門の授業料は1学期2円<sup>66)</sup>であったので、3学期制から単純に月で換算すると一月50銭となる。さらに届け出により半額の減納を許可されることがあったので、十分な収入をもたなかった小川はこの制度を使ったのではないかと推測する。小川の入学した明治15年は給費制度が予備門になく、当時300名ほどの生徒全員が自費生<sup>55)</sup>だった。明治16年4月から褒賞給費制度が導入<sup>67)</sup>されるが、予備門全体で6人しか選定されず、小川と同級で選ばれたのは三好学、澤邊昌麿、池田菊苗の3人だけ<sup>68)</sup>だった。ところが小川の収入状況は、予備門第二級に進級してしばらくすると大きく改善され

る。愛媛の奨学金の給費が受けられたのである。

明治16年6月、旧松山藩主であった久松家が、旧松山藩士子弟の東京での学業を支援するための団体、常盤会を設立<sup>69)</sup>する。もともと久松家は旧松山藩士子弟に学資の支給や日本橋浜町邸内の長屋を無償で貸し与えるなど、子弟の学業支援活動を行っていた。そこに松山出身の在京の者たちが旧藩子弟の東京での就学を支援する財団設立と出資の相談を久松家に持ちかけたところ、久松家から全額出資することが提案され、それによって常盤会が設立する。在京の旧松山藩士5名以上、松山在住の旧藩士3名以上で任命された世話掛が学資支給や学生監督等を行った。賃費ではなく給費事業で、一ヶ月7円を上限として学資が支給されるとともに書籍購入代金は別に充当された。上京費用や病気回復が認められない者の松山への帰県交通費支給まで受けられる大変手厚い制度であった。給費生生徒心得にも本制度が旧松山藩主の徳義でありその趣旨を理解することがまず謳われた。旧藩子弟への恩恵的な学事奨励なので、もし賃費として返済が滞った場合の督促で双方の感情が疎隔することとなれば素志に反するため給費が選ばれた。藩士子弟を大事にする立場がよく表れている。さらに明治20年には各所に下宿していた給費生の保護と監督、給費生以外にも便宜を図る目的で、寄宿舎まで開設された。

この手厚い奨学制度の受給資格は、満年齢17歳以上25歳以下の品行方正で初等中学科を卒業または同等の学力を有する者であった。当初は旧藩地士族に限定されていたが、のちに一般の学生にも門戸が開かれた。明治16年、この奨学金給費生の最初の募集時に18歳の小川正孝も応募する。しかし残念ながら給費第一号には落選した。第一号に採用されたのは佃一豫<sup>70)</sup>だった。どうしても奨学生になりたかった小川は、常盤会へ建白書を書いた。その建白書が読む者の胸を打つ文学的な良文であったため給費生に採用された<sup>71)</sup>と後年小川は教え子に話している。確かに給費生の選定には年齢、学力、性質、学資の欠否に加え志望動機も選定基準に入っており、世話掛の協議によって久松家への推薦者を決定していたので、建白書が採用の決め手になることも十分にあり得た。そうして小川は給費生第二号となり、佃に遅れること二ヶ月の明治16年12月から奨学金を受給<sup>70)</sup>する。その次の給費生は明治17年2月に1名が選出された。次いで3月に3名、7月に2名と続く。3月開始の給費生の一人は正岡子規である。小川は常盤会から5円を給与<sup>47)</sup>され、そのおかげで学問に専心することができるようになった。

給費生になると、定期的に世話掛との面談があり、修学の状況などを報告する必要があった。学科の変更や転校、旅行や帰省を行うにも常盤会への許可が必要だった。東京の世話掛の一人に内藤素行(鳴雪)がいて、小川と

は面談を通じて仲を深めたと思われる。内藤と小川の付き合いは晩年まで続く。内藤は東北帝国大学総長となった小川を訪ね、俳画（図7）を贈っている<sup>72,73</sup>。小川の幼少からのあだ名である弁慶を描き、俳句「涼しさや君が眼裏の千松島」を添えて「弁慶さんの為」と書き記していた。77歳の内藤鳴雪が59歳の小川をなお弁慶と呼ぶ間柄であったのだ。

小川の常盤会給費には若干の疑問が残る。一つは給費額である。正岡子規は予備門時代に月7円、帝国大学時代は10円の給付を受けた<sup>74</sup>。小川の給費額が月5円と大きく差がつき、このことには疑問が残る。もう一つは期間である。他の給費生に比べて給費期間が極端に短いのだ。小川の給費期間は明治16年12月から明治19年の12月までの3年間である。東京大学予備門の第二級1学期末から帝国大学理科大学1年1学期末までに相当する。佃一豫の支給期間は明治23年7月までの7年間、10年以上給費を受けた者もいた。数年で受給が終わる者は在学中に死亡した者、あるいは途中で陸海軍兵学校に入学した者だけである。常盤会規則によれば給費の差し止めは許可を得ない転校や学科変更、退学した場合や放蕩や極端な成績不振、病気で修学不能に陥る場合であるが、小川にそのようなことはなかった。学費は当然この後、大学院を退学するまで必要となった。小川は明治19年に帝国大学が誕生した時に創設された文部省の賃費生に選ばれ、学資はそれで充当できたようだが、給費と賃費では大きな違いがある。この件は後で再度議論する。嶽陽名士傳には、久松家の給与金は故あって止められた<sup>75</sup>とだけ書かれている。小川も記者に詳しく語らなかったのであろう。

## 東京大学理学部及び帝国大学理科大学及び大学院時代 明治18年から23年まで（小川正孝20歳から25歳）

### 東京大学理学部の移転と研究環境

小川正孝は明治18年7月に東京大学予備門を卒業し、東京大学理学部に入学する。東京大学法理文三学部に入學した最後の世代となった。明治18年から19年にかけて、東京大学と関連の高等教育機関は大きな変革時期にあり、東京大学は明治19年3月の帝国大学令公布により廃止され、帝国大学へと生まれ変わる。まず、帝国大学設立までの変遷と校舎移転に伴う研究環境の変化について概観する。

帝国大学が生まれる直前、東京大学の移転と理学部の再編が行われる。東京大学法理文三学部は明治10年の創設時には校舎のある神田一ツ橋から先に医学部が新築移転していた本郷の地へ移転する計画をたて、文部省に提出<sup>76</sup>した。主に経費の問題で紆余曲折<sup>77</sup>はあったが、法文学部は明治17年8月に新校舎とともに本郷に移転

を果たす。移転に大きな経費がかかる理学部は、<sup>い</sup>医学部の各施設を間借りする形で神田一ツ橋から本郷へ移転し、その後本郷に建設される新しい理学部各施設へと移る二段構えで移転することとなった。理学部の第一段階の移転は大学事務室、新築病室の流用と仮設の建物等の利用<sup>78</sup>で明治18年8月末に完了する。病室の教室使用期限は1年だった。移転により本郷で最初に新築される理学部校舎はレンガ造り2階建地下室付きの化学実験場で、着工は明治17年、竣工は明治21年だったが、完成すると化学科専用の建物のはずが地学科、物理学科も同居することとなった。地学、物理学科が1階を、化学科が2階を使用した<sup>79</sup>。さらに最終的にその建物は物理学教室となる。化学専用教室が別棟で完成するのは大正5年のことだった<sup>80</sup>。

明治18年末には東京大学理学部の学科再編もあった。理学部にあった機械工学、土木工学、採鉱冶金学、応用化学、造船の諸学科が、明治18年12月に理学部から分離して工芸学部となった<sup>81</sup>。同時期に工部省が廃止され、所管していた工部大学校が文部省へ移管される。明治19年3月に帝国大学が創設されると、旧東京大学理学部工芸学科と旧工部大学校が合わさり工科大学が設立される。当初の工科大学は芝区虎ノ門にある旧工部大学校校舎を使用していたが、本郷の校舎が明治21年に完成し、同年7月末に移転する<sup>82</sup>。

前年度まで理学部と予備門は同じ神田一ツ橋の校舎だったが、明治18年9月、東京大学理学部入学と同時に小川正孝は3年間通った神田一ツ橋の校舎から本郷の校舎へと移ることになった。そのさらに3年後、理科大学卒業半年前に、新しい理学部校舎へとまた引越すことになる。小川は最高学年の学生として引越し作業にも中心的に働いたに違いない。制度の変化に翻弄されながらも小川は持ち前の正直さで雑事も研究も真面目に取り組んだであろう。

東北帝国大学時代の教え子である小竹無二雄が当時の大学での実験環境について、小川から伝え聞いた逸話を残している<sup>83</sup>。小川が在籍していた当時、東京大学にはまだガスが来ておらず、有機化学の元素分析はうなぎ屋がうなぎを焼くときに使うような炉に炭火をおこして実験していたとのことである。事実、明治19年、帝国大学の醫理二大学ではガスで実験できないことが問題になっていた<sup>84</sup>。工科大学は工部大学校時代から東京瓦斯会社より石炭ガスを購入して引用していたが、醫科大学、理科大学ではアルコールを使用していた。当然アルコールでは十分な熱量が得られず、実験内容の制約や実験時間超過の問題に直面する。そこで工科大学の本郷移転に合わせて、三大学全て燃料をガスに統一することとなった。明治19年11月のことである。同時に法文二大学を合わせた五大学、図書館、医院、寄宿舎等の街灯の

形式も統一することとなった。石油燈、ガス燈、電燈と各施設が使用している備品がバラバラだったところ、火災等の安全性、初期投資額、ランニングコストから明かりは東京電燈会社に委託して電燈を運用することとし、燃料は大学構内に大型のガスタンクを設置、夜間配送のガスを貯蔵して構内それぞれに配管して使用することに決定した。この案の策定は設置された調査委員会が担当した。委員には小川の所属講座である理科大学化学科の教師ダイバースと同教授桜井錠二、工科大学教授高松豊吉、同助教授藤岡市助らで構成され、調査を行った。また、理科大学新校舎に引越した直後の明治22年5月にはガス漏れが発生、修繕しても度々起こるために、理科大学長から東京瓦斯会社へ原因究明の要望<sup>85)</sup>をしている。小川の在学時代は万事整った環境とは言えない状況で研究を行っていたことが分かる。

### 東京大学から帝国大学時代の所属

明治18年入学の小川は東京大学法理文三学部最後の世代と同時に、帝国大学理科大学最初の化学科卒業生となるが、この所属の変遷についてまとめる。東京大学は4年制の大学で、第一学年に入学するには東京大学予備門を卒業した者か、年齢16歳以上で予備門卒業生と同等以上の学力を認められた者に限られた<sup>86)</sup>。理学部には数学科、物理学科、化学科、生物学科、星学科、工学科、地質学科、採鉱冶金学科の8学科があった。さらに四年次で化学科は純正化学、応用化学が選択で分かれ、生物学科は動物学、植物学に、工学科は機械工学と土木工学が選択で分かれた。明治17年5月には海軍省付属造船学科が設けられ、明治18年12月に工学系の諸学科は工芸学科として理学部から別れたことは前述のとおりである。各学科専門に分かれるのは二年次からで、理学部では理学諸学科として全員が同じカリキュラムを履修した。小川と一緒に予備門を卒業して明治18年7月に理学部へ入学したのは20名で、他学部からの転入や新規入学も加え9月新学期には理学諸学科は23名となっていた<sup>87)</sup>。この中から工芸学科が分かれ、明治19年6月末調べで帝国大学理科大学へ進級予定の者は15名となった。その中で純正化学を選んだものは3名<sup>88)</sup>。小川正孝、池田菊苗もこの3名に含まれていたのはまず間違いない。東京大学の進級条件や成績判定は予備門と同じ基準で大変厳しく(表4)、予備門を卒業した優秀な学生であっても各学部とも退学者が出た。6月末調べの15人中、帝国大学理科大学へ進級できたのは12人<sup>89)</sup>。学科変更した者と退学した者がいた。化学科入学者は2名に減っていた。

明治19年3月に帝国大学が創設されると、それに応じて各高等教育機関の組織も統合、改組が行われた。帝国大学は東京大学より1年少ない3年制が採用された

<sup>90)</sup>。帝国大学理科大学は一年次より各学科に分かれる。ちょうど東京大学理学部第二学年が帝国大学理科大学第一学年に組み込まれた形になった。(図8)

それに伴い、旧東京大学理学部一年次の理学諸学科は、東京大学予備門が廃止されて新しく生まれた第一高等学校の最高学年に組み込まれた<sup>91)</sup>。第一高等学校は5年間の修業年限となり、さらに予備門の四から二級に相当する予科一から三級と、予備門一級と東京大学一年次相当となる本科一、二年に分かれた。結局、小川と池田は明治19年9月から創設した帝国大学理科大学化学科一年生となり、正しく進級しているにもかかわらず、2年連続の一年生を経験する。また、東京大学化学科時代には先輩が3級上すなわち四年生一人だけ<sup>88)</sup>で、その先輩も大学院に進まなかった<sup>89)</sup>ので、帝国大学理科大学発足当時、化学科の学生は小川正孝と池田菊苗だけだった。2人はその後、明治22年7月にストレートで帝国大学を卒業し、帝国大学理科大学化学科第1期卒業生となった。二人は旧東京大学から数えてちょうど50人目の化学科卒業生となった<sup>92)</sup>。

東京大学理学部と工部大学校の教員は帝国大学の理科大学、工科大学の教員に分けられた。帝国大学化学科の教員には、東京大学理学部から桜井錠二が教授、吉田彦六郎が助教授、久原躬弦<sup>くはらみつる</sup>が講師で就任し、工部大学校からはエドワード・ダイバースが教師、坪和為昌<sup>はが</sup>が助教授で就任した。前述の瓦斯調査委員の高松豊吉は東京大学理学部、藤岡市助は工部大学校から工科大学への就任だった。

小川らが在籍する間、化学科履修教科は毎年度変更された。もっとも理科大学化学科に在籍していたのは新入学生の小川正孝、池田菊苗の2名だけであり、上級生の教科が毎年変更されても履修する者がいないので現実的な問題はなかった。化学科はその後、明治20年に3人、21年に1人の新入生を迎える。小川在籍時代の化学科教科の変遷を表6にまとめておく。理科大学一年次でも座学講義に化学がなく物理学主体であった。当時の化学科では講義も試験も英語で行われていた<sup>93)</sup>。当初は教官の方が学生よりも多く、教授陣の研究への情熱を間近で見た小川らは、講義以上に多くのことを学び吸収したに違いない。

### 東大・帝大の給費制度と学生生活

東京大学及び帝国大学における学生の経費を比較(表2)すると、授業料は東京大学が1学期4円つまり年12円、帝国大学は一月2円50銭だが夏季休暇中の7、8月は授業料を納める必要がなく、年額25円<sup>94)</sup>であるから、東京大学から比べて年額で倍増している。寄宿舎生の費用は明治16年からの授業料、食費、光熱量合わせて月6円<sup>95)</sup>から授業料、食費、光熱費及び制服の被服料込

みでおおよそ7円50銭<sup>96)</sup>と25%の増加となっているが、授業料分を除くとともに月5円が生活費の計算となる。制服被服料とは明治19年4月に定められた大学院及び分科大学学生制服制<sup>97)</sup>によるもので、いわゆる学生服と制帽、襟には所属する分科大学の襟章がつけられ、小川の理科大学はアルファベットのS字の襟章だった。制服は明治19年11月実施されたが当初は学生の間でも混乱があったらしく、翌年2月には制服の着用がなければ教室、図書館、医院に入れなくする措置で着用を徹底づける通達もなされた。

大学の給費制度は、小川予備門在籍中の明治16年から、少しずつその意味を変え始めた。東京大学の給費制度はもともと経済的に就学困難で優秀な学生を救済する<sup>98)</sup>もので、授業料と寄宿舎で生活する費用を支給する<sup>99)</sup>ことで在学時の経済的負担を大きく軽減し、返済義務はあったが卒業後3年の猶予期間まで設けられる手厚い保護制度だった。明治15年の東京大学学生明細<sup>100,101)</sup>によると学生の給費比率は7、8割に及び130名の給費生が在籍した時期もあった。学生の寄宿舎利用率も高く、自費生であっても寄宿舎を利用し、寄宿割合は9割を超える学部も存在した。(図9, 10)

ところが明治16年3月に給費制度の意味合いが大きく変更する取り決めがなされる。学業奨励のための褒賞給費制度と補助給費制度<sup>67,87,102-105)</sup>である。前者は予備門を含め成績の最も優秀な学生に月7円の奨学金を給費するもので、年によって5から21人が選出<sup>58)</sup>された。後者は従前の給費生を引き継ぐもので、給費生は補助給費生に移行することで引き続き給費を受けることができた。ただし移行には卒業後の就職条件を承諾<sup>106)</sup>する必要がある。卒業または退学の日から給費を受けた年数と等しい期間、文部省もしくは東大総理が命じればその職業に就かねばならないという条件であり、学生の就学支援に加えて優秀な学生を省庁や学校へ排出、人材確保するための制度への変更を意味した。実際に補助給費生が大蔵省、外務省、日本郵船や地方中学校、銅山などに就職しその責務期限を調査した結果が残っている<sup>107)</sup>。また、明治18年には給費の停止条件や選抜人数の制限などが強化され、給費制度は選抜主義、育英主義へと変化した<sup>108)</sup>。明治18年11月末の調査結果<sup>87)</sup>では、理学部で学生数68人に対して表彰給費6人、補助給費32人、自費生30人、給費比率は56%、法学部の給費比率は46%、文学部で60%まで減少した。

明治19年、帝国大学が創設されると、学生の給費制度は優秀な学生を各界へ排出することを条件にした賃費制度に変更され、各省庁、産業界から広く奨学金を募集し、支援をうけた学生は原則賃費期間と同じ期間の就労義務を負う制度となった<sup>109)</sup>。加えて省庁や分科大学の賃費生には利息が付き、その分の返還も必要となったこ

とが帝大奨学制度の特徴だった。もっとも、理科大学や文科大学は東京大学時代からすでに就職難が問題化されており、就職先の大部分は教職員、行政、政商資本企業であった<sup>110)</sup>。逆に言えば企業にとって即戦力となり得ない専門分野について、優秀な学生の就職先の斡旋の意味も兼ねており、このことは帝大の賃費制度の趣意書にも謳われていた。帝国大学は国家須要の学術技芸の理論及び応用を教授しかつその蘊奥を攻究することが目的<sup>111)</sup>であり、そのために経済的に修学困難でも優秀なすべての学生に学資を給するべきだが、その範囲は大変広く、限りある費用ではその目的を達せないため、純正の原理を探る学科を保護対象として大学給費規定を作り東京大学以来の給費制度を事実上継承し、応用の学科に至っては官庁、企業、個人の賃費を広く募集する、と趣意書には書かれている。帝国大学創設時の奨学金は表7にまとめている。特別な保護を要する学科は、法理学、哲学、史学、和文学、漢文学、博言学、数学、星学、物理学、純正化学、地質学、動物学、植物学<sup>112)</sup>と定められた。小川の在籍する理科大学は特別な保護を要する学科であり、理科大学賃費と文部省賃費、三菱社奨学賃費の奨学金に応募することできた。

学生支援には奨学金制度に加え、寄宿舎制度も設けられていた。東京大学では給費生は寄宿舎への入舎が義務付けられ、給費金額と授業料及び寄宿舎での生活費はほぼ同額だった。ところが、明治17年8月の法文学部の本郷移転、翌年8月の理学部移転により学生支援である寄宿舎が一時期その機能を停止する。(図8)明治17年から18年にかけて、移転が一年遅れた理学部こそ一時的に寄宿率が増加するが、法文学部は寄宿率が移転前の半分近くに落ち込み、三学部とも移転が完了した明治18年9月以降は三学部学生全員が通学生となった<sup>87)</sup>。本郷に寄宿舎が完成したのは帝国大学が始動した明治19年9月。帝国大学は学生全員が寄宿する全寮制を目指したが、スタート時から施設が不足したため寄宿舎に準ずる大学近隣の公認寄宿所を指定し、学生は寄宿舎と公認寄宿所に寄宿する旨を通達<sup>113)</sup>し、通学生は特別の理由による許可制にした。しかし実情は寄宿舎が30～40%、通学生は45%にも上り、有名無実の全寮制であった。

## 大学時代の小川

前述のとおり、小川正孝は予備門第二級時の明治16年12月から旧松山藩の常盤会奨学金を受給していた。予備門は数名の褒賞給費生を除き全員が自費生だったので、この奨学金が小川の生活をかなり助けたのは想像に難くない。嶽陽名士傳<sup>114)</sup>には、月5円の受給で小川の食生活が改善され、鋭気を養い、学問に専念できるようになった喜びが記されている。小川在籍中の予備門は本

費生徒300名程度のうち寄宿生が平均して約3割だった。(図11) 予備門で寄宿舎に入舎しても学校奨学金の給費は受けられない。予備門入学前に英国人同居から逃げ出したエピソードから次に住む場所が見つかったと考えたと、わざわざ寄宿舎に入る理由が考えられないため、小川の寄宿の可能性は低いと推測できる。

東京大学時代である明治18年のことについては資料に乏しい。本郷に移転して全員が通学生になったので、少なくとも寄宿舎生活はしていない。母親との同居を感じさせる記述の資料があるが、それらの考察は小川の卒業時の住居と一緒に後述する。

小川は明治19年帝国大学理科大学に入学すると理科大学賃費生に出願した<sup>115)</sup>。理科大学の出願者は在学32名の内、理科大学賃費生に11名、文部省賃費生に1名、三菱社奨学賃費生に1名の計13名だった。学年の内訳は一年生が10名で残り3名が二、三年生だった。理科大学の小川と同級生は12名だったので、ほぼ全員が出願したことになる。大学賃費生は成績順で上位7名が選ばれ、選にもれたうちの3名は文部省賃費に振り替えられた。小川は振り替えられた一人だった。理科大学同級12名理科大学賃費から1名の願い下げがあり、三菱社出願者は認められなかったため、理科大学は明治19年9月29日付で計11名の賃費生を帝国大学に推薦した。同じような選抜が他の分科大学でも行われ、帝国大学は明治19年10月12日付で、理科大学の小川を含む10名の賃費生を文部省に推薦(図12)し、翌々日の14日から早速給費が始まった<sup>116)</sup>。

文部省賃費生は理科大学賃費と同じく年間85円を上限に給費<sup>117)</sup>された。85円の内訳は通常月が7円50銭で、授業料納付の必要がない7、8月が5円の計算である。基本的に寄宿舎で生活するに足る額の給費となっている。返還時には年6分の利子がついた。新制度一年目であったので、特別保護を要する理科文科大学の新入生は原則全員が賃費生に出願することになっていたのかもしれない。明治19年末の学生明細<sup>118)</sup>によると、理科大学、文科大学では、一年生は理科大学の辞退者を除き全員賃費生になっている。自費学生は二、三年生だけだった。授業料が免除されている特待生さえも一年生は賃費を受けた。自費の特待生は上級生だけであった。賃費生出願経緯が書かれた資料は見つからない。小川は帝国大学入学当初、文部省賃費と常盤会給費の2つの奨学金を受給していた。2つの受給が小川の常盤会需給期間の短さに関係したであろうと推測できる。文部省賃費が始まったのが明治19年10月14日で、常盤会は同年12月を最後に給費が終わる。嶽陽名士傳<sup>114)</sup>はこの事実に触れ、文部省賃費で帝大の学費を納入し、常盤会の給費は訳あって止められたと記載している。2つの奨学金を同時に受け取ることを常盤会の面談で問題にされたので

あろう。小川にとっては、前述のように、大学の都合で文部省の賃費に組み込まれただけだったのかもしれない。もし正岡子規と同じく東京大学入学と同時に給費額が増額されていたなら、文部省賃費に応募する理由がない。小川の場合は文部省賃費より常盤会給費の金額が少なかった、あるいは小川の例がきっかけとなって後輩の給費額が増額された可能性も考えられる。それらを判断する資料は今の所見つかっていない。既存の資料では、小川正孝が明治20年から文部省賃費で帝大時代を生活したことだけを教えている。小川の関係する奨学金制度については表8にまとめておく。

## 理科大学卒業と大学院

予備門、東京大学、帝国大学理科大学とどの学校もとても厳しい課程の中、小川正孝は見事ストレートで修了し、明治22年7月理科大学を卒業。大学院へと進学する。明治22年7月の理科大学卒業から9月の大学院入学までの事務手続きで、小川に関する多くの資料が東京大学に残っているので、時系列的に紹介する。

卒業の直前の明治22年7月5日付で大学院の入学願書<sup>119)</sup>を提出した。(図13)この年の理科大学の大学院入学志願者は数学1名、化学2名、生物学3名の計6名だった。願書には亜硝酸、亜磷酸、亜硫酸反応という研究テーマが書かれており、小川が理科大学で無機化学を専攻していたことがわかる。7月9日には卒業式に臨席する親戚を届けている。卒業生は2名まで招待することができ、母親のよし(嘉だが届出名簿にはひらがなで記載)と、親戚の大内宣譽の2名を届出<sup>120)</sup>した。(図14)翌10日が卒業式で理科大学からは10名が卒業した<sup>121)</sup>。この時作成された名簿(図15)で小川の出身地が愛知と書き間違えられており、前年度までの大学一覧には正しく愛媛と記載されていた小川の出身地が翌年度から愛知と誤植<sup>122)</sup>されるのは、この卒業名簿の影響と考えられる。同様に官報に記載された卒業名簿<sup>123)</sup>も小川の出身は愛知と誤植された。

卒業した7月10日付で文部省賃費額が日割り計算され、小川の返納額は235円96銭8厘に決定したと文部省から通知<sup>124)</sup>があった。文部省賃費は卒業後に高等師範学校または中学校への就職が条件だったため、翌11日には、大学院への進学の報告と賃費の継続について、帝国大学が文部省に照会<sup>125)</sup>している。7月24日には文部省から大学院入学と給費の継続について承諾する通知が届いた。この文書において賃費の条件である中学校教員が高等中学校の教員であることが示され、大学院在学中でも欠員が出れば着任するように指示されている。翌日25日付で小川の入学許可辞令書と高等中学校教員欠員時の任用通知の受領書<sup>126)</sup>が留主引請人、大内宣譽名で大学へ提出される。(図16)7月26日付の官報には小

川らの大学院入学が報じられる<sup>127)</sup>。文部省賃費については大学院入学の承認と賃費継続の手続きは行われたが、卒業後の返還延期の手続きがされていなかったので文部省会計局から返還の請求があったものと思われる。延期願<sup>128)</sup>を9月14日付で提出している。

帝大1期生が初めて卒業し大学院へ入学するということが事務処理も余裕がなく慌ただしかったであろうことが日付の刻み方からもよく分かる。いくつかの文書は小川の直筆であったようだが、文書によってはかなり乱れた文字を書いている場合もあり、大学からの急な書類提出指示に困惑したのではないかと想像される。大学院入学関係の書類については、明治22年9月19日付で小川の大学院の研究指導教官がダイバースと桜井錠二に決まったとする報告<sup>129)</sup>が理科大学から帝国大学に出されることで一区切りがつく。(図17)

### 大学院の退学と就職

小川の大学院生活は一年足らずで突然終焉する。静岡尋常中学校への就職が決まったからだ。静岡行きの経緯は不明だが突然決まったのであろう。それから先の事務処理の慌ただしさから、十分準備された就職でないことが読み取れる。

明治23年5月19日、小川は退学届<sup>130)</sup>を提出する。(図18)届には就職のためとは書かれず、学資支弁の途がないためと記載されていた。続く5月26日付で教員免許取得のため、免許検定願<sup>131)</sup>を文部省に提出する。同日、帝国大学は文部省宛に小川が学力、人物、健康面で教員たる資質を有している旨の推薦文とともに小川の検定願を送付した。小川の検定願には明治19年12月の文部省令尋常師範学校尋常中学校及高等女学校教員免許規則<sup>132)</sup>により検定の依頼と検定料の問い合わせが書かれていた。この規則は教員免許取得について定められたもので、第六條には教員免許取得には試験による学力検定が必要であり、かつ但し書きに国内外の高等学校を卒業したもので検定委員が教員に適した学力があることを認める場合は試験が免除されること、第九條には検定に履歴書が必要なこと、第十條に検定料の金額が定められている。帝大大学院生の小川には十分な学力が当然認められるので、文部省教員検定委員から上記規則第九條に従う履歴書の送付が求められ、5月30日付で帝国大学は履歴書の送付と検定料について報告している。小川が尋常師範学校尋常中学校高等女学校教員免許状を受領したのは6月13日のことだった。

高等中学校教員の欠員待ち状態だった小川は文部省の指示があればその任につかなければならない。賃費返還期間内の小川には職業選択に制限があり、静岡尋常中学校へ就職することについて許可を得る必要があった。退学届に就職のためと記載されなかったのは、このことに

関係するのではないだろうか。5月26日に元文部省賃費生小川正孝名で、文部省賃費規則に依り文部省指定場所として静岡尋常中学校は差し支えないかを帝国大学に伺い、同日、帝国大学が文部省総務局へ問い合わせをしている<sup>133)</sup>。この問い合わせに対する文部省の回答には時間がかかっており、問題ないと回答が帝国大学に送られたのは6月24日付だった。小川に通達されたのは7月5日、小川正孝名で通知の受理を返送したのは7月8日であった。

静岡尋常中学校への就職に対する回答については形式的なことだったのであろう。回答が来る前に教員免許が交付<sup>134)</sup>され、免許交付より前に小川は静岡尋常中学校に着任した。静岡尋常中学校では農業、化学、博物の科目を担当していた秋山保教諭<sup>135)</sup>が明治23年3月18日付で退職<sup>136)</sup>し、理科の教員が不足していた。小川正孝はその理科の教諭として6月2日付で着任した。慌ただしかった小川就職スケジュールを表9にまとめる。

### 大学時代の小川の住所

東京で学問に励んでいた時期の小川正孝の住居についてはほとんど明らかになっておらず、具体的な住居は日本橋浜町の久松邸の書生部屋だけだったが、今回の東京大学文書資料の調査で、いくつか明らかになったことを基に、他の資料との関連性から書生時代の小川の住居について考察してみる。

明治22年卒業名簿<sup>121)</sup>、大学院入学願書<sup>119)</sup>には小川の住所が記されており、小石川区指ヶ谷93番地であった。また、卒業式にも臨席した親戚の大内宣譽は小川の大学院入学に関する種々の事務書類が送付された留主引請人であり、その住所<sup>119)</sup>は小石川区指ヶ谷92番地であった。さらに、小川は明治23年4月22日付で帝国大学に転居届<sup>137)</sup>を提出しており、その住所は小石川区指ヶ谷94番地である。近隣の地番が掲載された大正元年発行の地籍図<sup>138)</sup>(図19)を参照すると、3つの住所は地番のとおり並んでおり、小川は大内家のすぐ隣に住んでいたことがわかる。94番地は敷地の形から下宿のような形態の住居だったのかもしれない。

大学時代の小川は親戚である大内宣譽宅に寄留していたと考えるのは自然ではないだろうか。奨学金を主な収入源として経済的にギリギリの生活を親戚の大内が支援していた可能性は考えられる。皇族も参列する卒業式に母親とともに招待することで、東京での生活の恩返しの一つになったのではないだろうか。さらに小川が入学した各学校には保証人の提出が義務付けられていた<sup>139)</sup>。大内の名はそこに挙げられる候補としては有力であろうと推測できる。明治20年に常盤会寄宿舎が設立され、東京で修学する愛媛県の学生の多くが利用していたが、小川が利用した記録は残っていない<sup>140)</sup>。小川の大学時

代の住居が小石川区指ヶ谷であるなら、常盤会寄宿舎を利用しなかった事実とも整合する。

予備門を卒業した明治18年7月、小川正孝は郷里の松山に帰省し、そして今度は母親と一緒に上京したとの記述が嶽陽名士傳にある<sup>144)</sup>。また、小川の静岡尋常中学校教員時代には母親、妹と同居していたことは遺族の資料から確かである。嶽陽名士傳は静岡県の名士を紹介した書籍で、記者が静岡の小川宅まで取材に来たことが小川の遺族資料から分かっている。取材時期は出版年から考えて明治23年から24年初頭であると推察できるので、記者の表現に多少の誇張はあったとしても、小川の記憶的にも事項と時系列はある程度信頼できると考えられる。明治18年の母を伴った上京は入学式を見せるためだったのか、同居を目的としていたのか、小川の家族との同居時期を決定づける資料はまだ見つかっていない。

小川は常盤会の給費が早くに終わり、常盤会寄宿舎入居の可能性も低いが、上京していた当時の同郷の学生生徒と決して関係が薄かったわけではない。東京でともに勉学に励んでいた松山中学時代の同級生の西原義任<sup>141-143)</sup>が、明治22年、小倉裁判所に赴任するので送別会を開いた時の写真が残っている。(図20)前列右から3人目中央で座っているのが西原、その左後ろで立っているのが正岡子規、後列右端が小川である。神田淡路町で撮影された。学校が違うからか皆それぞれに違った制服や服装である。小川は帝大の学生服を着用している。正岡子規は小川とは違った学生服を着ているので、これが当時の第一高等中学校の制服だったと思われる。小川が残した写真には「友人西原義任氏西国に赴任するときに写す」とメモが書かれていた。同じ写真を正岡子規も残していた<sup>144)</sup>。学年も少しずつ違ったはずだが、同時期に東京で頑張った者同士こうして集まっていた姿が今でも写真で見ることができる。

## おわりに

今回、明治期に書かれた書籍、学校がまとめた年報、一覽、史誌や明治当時の事務文書を検証することで、小川正孝の過ごした明治10年代後半から20年代初頭の東京大学を中心とした学生の生活環境を整理した。それにより小川の過ごした書生時代について、既存のエピソードをつなぐ史実を明らかにでき、当時の小川の生活について新しい知見を提供できた。

上京時期の特定とその後の各学校と入学時期の同定ができた。当時の学生の進学コースや修学年代、学校制度の変遷を踏まえないと混乱してしまうもので、大学予備門に入るための学校の存在や大学等の修業年限が数年で変更していた事実と照らし合わせなければ、小川の進学

した道筋を明らかにすることはできなかった。小川の進学したコースと年数を調べることで、小川の優秀な成績と学問に取り組む姿勢を垣間見ることができ、それを一部成績表で確認することもできた。また、以前より難問であった大学での奨学金についても発見できた。常盤会給費時期は愛媛県の資料から、小川の修学時期の全てをカバーできないことが知られていたが、今回、常盤会給費以降に受給された文部省奨学金について物証とともに明らかにできた。ただ、なぜ常盤会より文部省を選んだのかという新たな疑問を生む結果となった。このことを理解する新しい資料の発見が待たれる。

小川が書生時代に過ごした場所についてもいくつか特定することで、既存のエピソードとの関連性を考察した。苦学するエピソードから、小川は愛媛県の常盤会寄宿舎を利用して然るべきなのにその痕跡が見つからなかったことは、同時期に親戚宅へ寄留していたことに関係すると考察された。寄宿舎や同郷の学生とは連絡を取り合っていたが、入舎を選ぶ必要がなかったと考えることで寄宿舎の疑問に答えることができる。母親の上京や卒業式への招待資料の発見は、小川が大変母親を大事にする人間だったこと<sup>7-9,145)</sup>の裏付け資料の一つとなった。親戚の特定は小川の東京での生活をサポートした者の存在を示唆する。サポートの具体的な事実を特定するまでには至らなかったが可能性を提示できた。

科学の研究者が自分の業績を論文や報告書にまとめることは多くても、自分自身について残すことは一般人と同じように少ない。ましてや公開されることはもっと稀なケースとなる。しかし、実物として書籍や文書、写真などが残っていれば、その中から当時の生活を紡ぐ試みも不可能ではなくなる。意識せずとも残っていた本人の痕跡が未整理の資料から発見されれば、その人物の深い理解が得られるであろう。資料を残す博物館等施設の役割の重要性を信じ、新しい資料の発見とさらなる小川正孝顕彰の機会を待ちたいと考える。

## 謝 辞

本稿をまとめるにあたり、吉原賢二氏には多くの資料を提供いただくとともに小川正孝の生涯についてご教示いただいた。水関秀雄氏には多くの資料や情報のご提供をいただいた。坂の上の雲ミュージアムの川島佳弘氏には、資料のご提供や明治期の教育制度についてご教示いただいた。愛媛県歴史文化博物館の井上淳氏、平井誠氏には明治期の文書資料の翻刻についてご協力をいただいた。愛媛県立東温高等学校の千葉昇氏には愛媛における小川研究の状況についてのご教示、有益な助言をいただいた。小川正道氏、小川伸道氏には資料のご提供や小川正孝の生涯についてお話をいただいた。東北大学史

料館、東京大学文書館、愛媛県立松山東高等学校、愛媛県立図書館には資料の閲覧等で協力いただいた。ご協力いただいた皆様に心より感謝いたします。

### 参考文献

- 1) IUPAC. "IUPAC is naming the four new elements nihonium, moscovium, tennessine, and oganesson." 8 June 2016, <https://iupac.org/iupac-is-naming-the-four-new-elements-nihonium-moscovium-tennessine-and-oganesson/>
- 2) H. K. Yoshihara. Nipponium, the Element Ascribable to Rhenium from the Modern Chemical Viewpoint. *Radiochimica Acta*. 1997, vol.77, no.9, pp.9-13.
- 3) H. K. Yoshihara. Discovery of a new element 'nipponium': re-evaluation of pioneering works of Masataka Ogawa and his son Eijiro Ogawa. *Spectrochimica Acta Part B Atomic Spectroscopy*, 59, 2004, pp.1305-1310.
- 4) H. K. Yoshihara. Nipponium as a new element (Z=75) separated by the Japanese chemist, Masataka Ogawa: a scientific and science historical re-evaluation. *Proceedings of the Japanese Academy, Series B*, 84, 2008, pp.232-244.
- 5) 吉原賢二. 夕映えの杜に. イー・ピックス出版, 2009, p.68.
- 6) 吉原賢二. 小川正孝のニッポニウム発見—その劇的な展開. *化学と教育*, 66 卷, 1 号, 2018, pp.4-7.
- 7) 吉原賢二. 小川正孝の栄光と挫折. *化学史研究*. Vol.24, 1997, pp.295-305.
- 8) 吉原賢二. 科学に魅せられた日本人. 岩波書店, 2001, pp.6-46.
- 9) 吉原賢二. "人生の波乱—小川正孝の人生ドラマチック." 小川正孝のニッポニウム再評価資料集 (自費出版). 2016, pp.9-14.
- 10) 水関秀雄. "小川正孝の実績と紹介." 松山大学創立 80 周年記念論文集編集委員会. 松山大学, 2004, pp.485-517.
- 11) 愛媛県立松山中学校 松山第一高等学校 愛媛県立松山東高等学校同窓会. 会員名簿第 9 号 昭和 37 年度版. 松山東高校同窓会本, 1962, p.1.
- 12) 愛媛県. 愛媛県史 近代上. 愛媛県, 1986, pp.767-768.
- 13) 愛媛県立松山中学校同窓会. 昭和七年度同窓会名簿. 1932, p.15.
- 14) 前掲 11 p.3. 愛媛県立松山中学校 松山第一高等学校 愛媛県立松山東高等学校同窓会. 会員名簿第 10 号 昭和 42 年度版. 松山東高校同窓会本, 1967, p.3. ただし、第 9 号は明治 14 年 5 月輩出と誤植している。
- 15) 山田萬作編. 嶽陽名士傳. 1891, pp.883-885.
- 16) 例えば各学校の入学等規則がまとまった資料として: 東京諸學校則一覽 上ノ卷. 英蘭堂, 1883.
- 17) 山崎善啓. 瀬戸内近代海運草創史. 創風社出版, 2006, p.56.
- 18) 山崎善啓. 幕末・明治初期の開運事情. 創風社出版, 2011, p.99.
- 19) 前掲 18 p.112.
- 20) 日本経営史研究所. 近代日本海運生成史料. 日本郵船株式会社, 1988, p.255.
- 21) 日本国有鉄道. 日本国有鉄道百年史 1. 財団法人交通協力会, 1969, p.104.
- 22) 常盤會及常盤會寄宿舎史. 1915, p.11.
- 23) 東京大學三學部編. 東京大學法理文三學部一覽 從明治十三年至明治十四年. 1881, pp.346-357.
- 24) Tokyo university Calendar of the Departments Law, Science, and Literature 2540-41(1880-81). 1881, pp.183-190.
- 25) 東京大學三學部編. 東京大學法理文三學部一覽 從明治十四年至明治十五年. 1882, pp.178-189.
- 26) 日本化学会編. 日本の化学—100年の歩み—. 化学同人, 1978, p.26.
- 27) 東京大學三學部編. 東京大學法理文三學部一覽 從明治十五年至明治十六年. 1883, p.234.
- 28) 東京大學三學部編. 東京大學法理文三學部一覽 從明治十六年至明治十七年. 1884, p.243.
- 29) 東京大学文書館所蔵資料. "前川亀次郎新潟県へ任用之件." 東大文書館文部省往復 明治十六年分五冊之内乙号, 1883.
- 30) 四十餘年前の恩師草間時福先生. 草間先生謝恩會, 1922, pp.17-19.
- 31) 東京大學醫學部. 東京大學醫學部一覽 明治十三、四年. 東京大學醫學部, 1881, p.171.
- 32) 東京大學. 東京大學醫學部一覽 從明治十四年至明治十五年. 東京大學醫學部, 1882, p.168.
- 33) 前掲 22) p.1.
- 34) 正岡子規. "自炊." 筆まかせ第一編 子規全集 第十一卷. 改造社, 1930, pp.109-112.
- 35) 明治 17 年発行の五千分一東京図測量原図東京府武蔵国日本橋区浜町及本所区相生町深川区常盤町近傍 (図 1)
- 36) 東京大学文書館所蔵資料. "予備門本龔入学規則中追加ノ件." 文部省往復 明治十五年甲三. 1882, p.433.
- 37) 東京大学. 東京大学百年史 通史一. 東京大学出版会, 1984, p.580.
- 38) 東京開成中学校. 東京開成中学校校史資料. 1935,

- pp.7-12.
- 39) 前掲 37 p.565.
- 40) 前掲 38 p.21.
- 41) 改正共立学校諸規則. 1880
- 42) 前掲 38 p.11.
- 43) 前掲 15 p.886.
- 44) 遺族手記による
- 45) 青山新一. “故小川先生の面影.” 東北帝国大学理学部自修会, 1931, pp.12-14.
- 46) 青山新一. “小川正孝先生.” 我等の化学, Vol.4, 1931, pp.7-8.
- 47) 前掲 15 p.887.
- 48) 東京大学豫備門. 東京大学豫備門一覧 本龔 自明治十五年至明治十六年. 1882, p.25.
- 49) 前掲 37 p.594.
- 50) 遺族手記による
- 51) 前掲 38 p.22.
- 52) 前掲 37 pp.594-595.
- 53) 前掲 37 pp.567-571.
- 54) 前掲 48 p.55.
- 55) 前掲 48 p.45.
- 56) 前掲 37 p.572.
- 57) 前掲 48 p.22.
- 58) 東京大学文書館所蔵資料. 文部省往復明治十五年分乙号之三, 明治十六年分五冊之内丁号, 文部省開申請表明治十七年及び十八年の各月でまとめられる東京大学予備門生徒明細による
- 59) 前掲 37 p.597.
- 60) 前掲 48 pp.45-59.
- 61) 東京大学豫備門. 東京大学豫備門一覧 本龔 自明治十六年至明治十七年. 1884, pp.57-68.
- 62) 坂の上の雲ミュージアム所蔵資料. “明治十七年十二月(第一學期)東京大学豫備門前本龔第一, 二, 三級及ヒ第四級生徒試業優劣表.” 川島佳弘. “館蔵資料紹介「明治十七年十二月(第一學期)東京大学豫備門前本龔第一, 二, 三級及ヒ第四級生徒試業優劣表」.” 坂の上の雲ミュージアム通信 小日本, 第21号 2015年春号, 坂の上の雲ミュージアム, 2015, pp.14-15.
- 63) 第一高等學校. 第一高等學校本部一覧 自明治三十三年至明治三十四年. 1901, pp.132-145.
- 64) 前掲 37 p.599.
- 65) 前掲 63 p.136.
- 66) 前掲 48 p.36.
- 67) 東京大学文書館所蔵資料. “褒賞及補助給費生設置之儀ニ付伺.” 文部省往復 明治十六年分 五冊之内甲号. p.44.
- 68) 東京大学文書館所蔵資料. “褒賞給費生ノ件.” 文部省往復 明治十六年分 五冊之内丙号下. p.453.
- 69) 前掲 22 p.1.
- 70) 前掲 22 p.28.
- 71) 小野平八郎. “小川正孝先生 人間味素描.” 化学, 第16卷 第3号, 化学同人, 1961, pp.220-224.
- 72) 東北帝国大学理学部. 東北化学同窓會報第八號小川正孝先生追悼號, 1930, 口絵写真.
- 73) 吉原賢二. “ニッポニウム・小川正孝(明治十四年卒)をめぐって.” 明鏡. 37号 愛媛県立松山東高等学校同窓会編, 2007, pp.334-337.
- 74) 松山市立子規記念博物館. 第27回特別企画展「子規と常盤会寄宿舎の仲間たち」図録, 1993, p.83.
- 75) 前掲 15 p.888.
- 76) 東京帝国大学. 東京帝国大学五十年史上冊. 1832, p.527.
- 77) 前掲 37 p.508.
- 78) 前掲 76 p.542.
- 79) 坐隠子. “原子番号と未発見元素.” 東京化学同人. 現代化学, 1973年10月, p.65.
- 80) 東京帝国大学. 東京帝国大学五十年史下冊. 1832, p.1270.
- 81) 前掲 76 p.673.
- 82) 前掲 76 p.1212.
- 83) 日本化学会編. 日本の化学百年史-化学と化学工業の歩み-. 日本化学会, 1978, p.19.
- 84) 東京大学文書館所蔵資料. “大学ニ瓦斯及電気燈ヲ用ユル儀ニ付稟請.” 文部省往復 明治十九年. 1886, p.504.
- 85) 東京大学文書館所蔵資料. “理科大學ニ於テ使用ノ瓦斯度々漏泄ニ付完全ノ修営ヲ遂ケ度東京瓦斯会社長へ照會ノ件.” 明治二十一, 二, 三年諸向雜件往復. 1889, p.148.
- 86) 前掲 28 p.147.
- 87) 東京大学文書館所蔵資料. “東京大學學生々徒明細表.” 及び“東京大學予備門明細表.” 文部省開申請表 明治十八年. 1885, 各月
- 88) 東京大学文書館所蔵資料. “六月々末學生々徒調.” 文部省往復 明治十九年. 1886, p.281.
- 89) 帝國大學. “帝國大學一覧從明治十九年至明治二十年.” 1986, pp.160-163.
- 90) 前掲 89 p.22.
- 91) 前掲 37 p.988.
- 92) 廣田鑛藏. “化学者池田菊苗-漱石・旨味・ドイッ.” 東京化学同人, 1994, p.34.
- 93) 前掲 92 p.25.
- 94) 前掲 89 pp.35-37.
- 95) 前掲 28 pp.186-187.
- 96) 前掲 89 p.24.

- 97) 東京大学. “東京大学百年史 資料一.” 東京大学出版会, 1984, pp.845-848.
- 98) 前掲 76 p.565.
- 99) 前掲 25 pp.154-156.
- 100) 東京大学文書館所蔵資料. “東京大學學生々徒明細表.” 文部省往復 明治十五年分 乙号之三. 1882, 各月
- 101) 東京大学文書館所蔵資料. “東京大學學生々徒明細表.” 文部省往復 明治十五年分 乙号之四. 1882, 各月
- 102) 東京大学文書館所蔵資料. “褒賞給費生人員之儀ニ付伺.” 文部省往復明治十六年分 五冊之内甲号. 1883, p.50.
- 103) 東京大学文書館所蔵資料. “補助給費生之員数伺.” 文部省往復明治十六年分五冊之内甲号. p.46.
- 104) 東京大学文書館所蔵資料. “褒賞給費人員記載方之件.” 文部省往復 明治十六年分 五冊之内乙号. 1883, p.37.
- 105) 東京大学文書館所蔵資料. “東京大學學生々徒明細表.” 及び“東京大學予備門明細表.” 文部省開申請表 明治十七年. 1884, 各月
- 106) 東京大學. “東京大學第三年報起明治十五年九月止 明治十六年十二月.” 東京大學. 1884, p.6.
- 107) 東京大学文書館所蔵資料. “十七年十二月以降ノ補助給費生姓名責務年数取調ノ件.” 文部省往復 明治十九年. 1886, p.31.
- 108) 前掲 37 p.473.
- 109) 東京大学文書館所蔵資料. “学生養成之占意書及送付箇所書.” 文部省往復 明治十九年. 1886, p.1.
- 110) 前掲 37 p.475.
- 111) 明治十九年勅令 帝國大學令 第一條
- 112) 前掲 76 p.1023.
- 113) 前掲 37 p.887.
- 114) 前掲 15 pp.887-888.
- 115) 東京大学文書館所蔵資料. “文部省賃費及分科大学賃費生指令之件.” 学士養成関係 明治十九年. 1886, pp.76-77.
- 116) 東京大学文書館所蔵資料. “文部省総務局長へ文部省賃費生開届之通知.” 学士養成関係 明治十九年. 1886, pp.64-66.
- 117) 前掲 89 pp.82.
- 118) 東京大学文書館所蔵資料. “明治十九年末学生々徒明細表.” 文部省往復 明治二十年. 1887, p.41.
- 119) 東京大学文書館所蔵資料. “法学士山崎覺太郎外十四人大學院入學許可.” 明治二十二年大学院学生関係書類. 1889, p.84.
- 120) 東京大学文書館所蔵資料. “保証人親戚臨場届出人名.” 明治二十二年卒業證書授與式並上臨幸一件書類. 1889, pp.89-90.
- 121) 東京大学文書館所蔵資料. “卒業生族籍姓名調.” 明治二十二年卒業證書授與式並上臨幸一件書類. 1889, p.30.
- 122) 帝國大學. “帝國大學一覽 從明治二十二年至明治二十三年.” 1986, p.326.
- 123) 官報 第一八〇九號 明治二十二年七月十一日. “卒業證書授與人名.” 1989, p.4.
- 124) 東京大学文書館所蔵資料. “文部省へ賃費生志村源太郎外四人賃費返納方通牒ニ對シ同省ヨリ返納額調書添更正方照會.” 明治二十二年學士養成関係書類. 1889, pp.168-171.
- 125) 東京大学文書館所蔵資料. “文部省賃費理科大学々生岸上鎌吉外一人及同省元賃費同學生元田傳同上ノ義同省へ且本件差支ナクハ岸上鎌吉外一人へ尚二ケ年間賃費相成度旨ノ件.” 大学院学生関係書類 明治二十二年. 1889, pp.113-114, 117-119.
- 126) 前掲 119 pp.98-100.
- 127) 官報 第一八二二號 明治二十二年七月二十六日. “大學院入學及學術研究派遣.” 1989, p.4.
- 128) 東京大学文書館所蔵資料. “大學院生小川正孝文部省賃費返納延期願出ニ付同省会計局へ照會.” 大学院学生関係書類 明治二十二年. 1889, pp.138-142.
- 129) 東京大学文書館所蔵資料. “大學院學生元田傳外三名ノ指導教官ヲ宣ム.” 大学院学生関係書類 明治二十二年. 1889, p.148.
- 130) 東京大学文書館所蔵資料. “個人願ニ依リ大學院退學ノ件.” 大学院学生関係書類 明治二十三、二十四年大学院学生関係. 1890, p.31.
- 131) 東京大学文書館所蔵資料. “理学士小川正孝教員檢定願.” 文部省往復 明治二十三年. 1890, pp.315-320.
- 132) 文部省令第二十一號 尋常師範學校尋常中學校及高等女學校教員免許規則
- 133) 東京大学文書館所蔵資料. “小川正孝静岡尋常中學校へ就職願ノ件.” 明治二十三年學士養成関係. 1890, pp.114-118.
- 134) 小川正孝履歷書による
- 135) 靜中靜高百年史編集員會編. 靜中靜高百年史 上卷. 静岡県立静岡高等学校同窓会, 1978, p.364.
- 136) 静岡縣立静岡中學校. 静岡縣立静岡中學校一覽. 1901, p.29.
- 137) 東京大学文書館所蔵資料. “大學院學生小川正孝転居届.” 大学院学生関係書類 明治二十三年. 1890, p.29.
- 138) 東京市區調査會編. “小石川区 指ヶ谷町北部.” 東京市及接續郡部 地籍地圖 上卷. 1912, 小石川 14

- 139) 前掲 48 p.40. 前掲 27 pp.148-149. 前掲 88 p.13.  
140) 前掲 74 pp.38-39.  
141) 愛媛県立松山東高等学校資料. “明治十三年七月大試験表.” 松山中學校, 1880, 表面第六級.  
142) 愛媛県立松山東高等学校資料. “明治十四年大試験表.” 松山中學校, 1881, 表面第五級.  
143) 愛媛県立松山東高等学校資料. “明治十四年五月臨時大試験採點表.” 松山中學校, 1881, 表面第四級.  
144) 新潮日本文学アルバム 21 正岡子規. 新潮社, 1986, p.28.  
145) 永海佐一郎. “恩師小川先生を思ひ出して.” 東北化学同窓會報第八號小川正孝先生追悼號, 1930, pp.13-17.

### 脚 注

- \*1) このこととは無関係だが、吉田彦六郎は小川の帝国大学時代の化学科助教授である。  
\*2) ただし、明治 17 年東京大学予備門第一級のクラスだけ名簿がなく、確認できていない。

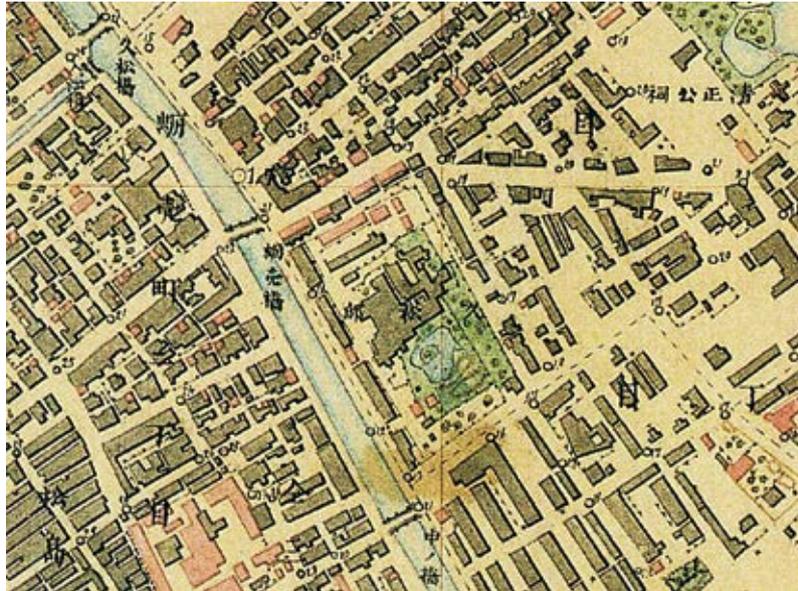


図1 日本橋浜町にある久松邸  
敷地左手，川沿いの南北に長屋が並んでいることが読み取れる．この長屋に旧松山藩士の子弟が勉学に励む書生部屋があった．  
明治十七年八月 五千分一東京図測量原図東京府武蔵国日本橋区浜町及本所区相生町深川区常盤町近傍  
(財)日本地図センター (1984) 複製・発行より改変して作成



図2 小川が通った学校の配置  
日本橋浜町の久松邸，神田淡路町の共立学校，神田一ツ橋の東京大宇学予備門と法理文三学部，本郷の帝国大学の理科大学（仮移転の元本部建物位置と理科大学新校舎位置），少なくとも理科大学卒業前から大学院時代の住所である小石川指ヶ谷の寄留先の位置関係を示す．  
明治九年明治東京全図（1876）より改変して作成

五五															五五																																											
第三級三ノ組															第三級二ノ組																																											
小原甲子太郎	藤正正勝	岡部平兵衛	岡田五見	松井久次郎	板東幸平	佐藤米吉	村瀬太郎	伊藤器藏	飯田萬吉	池田菊苗	松田光信	有坂季三	岸本雄之助	常松英吉	中井喜太郎	土山益次郎	原方幸次郎	中西源藏	西澤正太郎	津田俊郎	大熊米太郎	大澤三之助	熊谷安太郎	三上参次	澤逸昌	林平省藏	奥田省藏	平石氏人	安達恒三郎	山木萬福	橋高修吉	奥平萬五郎	小川正孝	副島製炭四郎	加賀秀之助	藤崎芳一	濱野敏三郎	辻清藏	大坪權六	小澤元吉	月倉馬三	李家隆介	高槻純之助	北金忠	千市達三郎	大瀬甚太郎	石川	東京	福井	三重	京都	山口	愛媛	鹿児島	東京	千葉	長崎	岐阜

図3 東京大学予備門第三級二ノ組名簿  
 明治15年に東京大学予備門第三級に所属したのは5組157名だった。大学院まで一緒の専門を歩むことになる池田菊苗と小川は予備門入学時から同じクラスであった。東京大学豫備門一覧 本巻 自明治十五年至明治十六年より抜粋

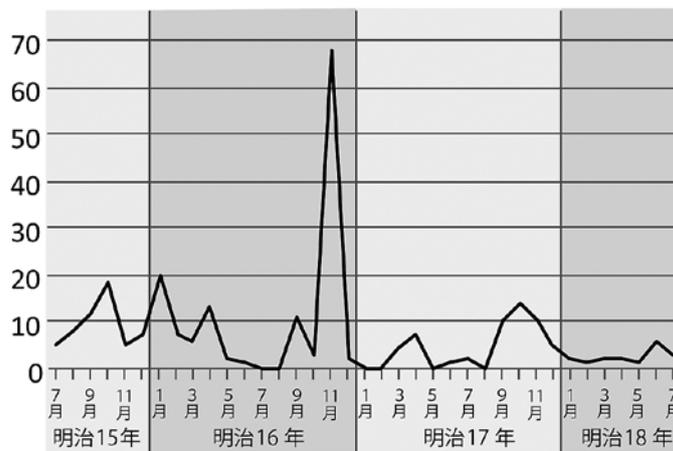


図4 東京大学予備門退学者推移  
 明治15年7月から明治17年6月までの東京大学予備門本校の退学者の推移グラフ。予備門では、年度末だけではなくほぼ毎月退学者を出していた。これらのほとんどは学業不振が原因による自主退学だと考えられている。ただし、明治16年11月の大量退学者は学業不振ではなく問題行動に対する処分による。  
 東京大学文書館所蔵資料 文部省往復明治十五年分乙号之三、明治十六年分五冊之内丁号、文部省開申諸表明治十七年及び十八年の各月の東京大学予備門生徒明細から作成





図7 内藤鳴雪が小川正孝に贈った俳画。  
「涼しさや君が眼裏の千松島 為弁慶さん七十七鳴雪」  
小川家では掛け軸にして保存されている。

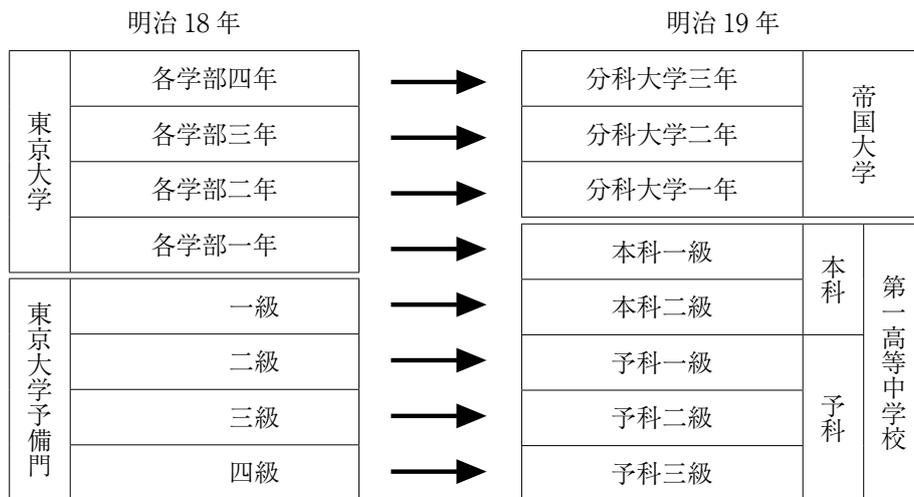


図8 東京大学から帝国大学への年次組み替え  
4年制の東京大学から3年制の帝国大学へ生まれ変わったため、東京大学の1年目が旧予備門である第一高等学校の最高学年に組み込まれ、予備門第一級の学年と合わせて本科一、二級に編成された。明治18年に予備門は東京大学から独立し文部省の直轄校となったことから学科改正があり、本費第三級の下に改正学科四級が作られた。この改正学科四級と本費三級（改正学科三級）、二級は予科一から三級として再編された。

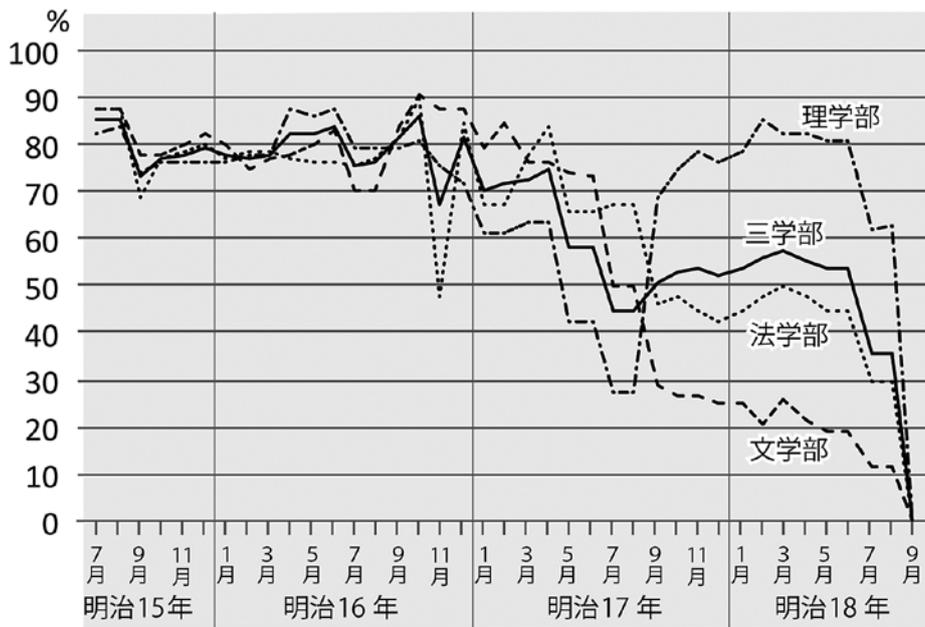


図9 東京大学法理文三学部の寄宿率

東京大学三学部では給費制は寄宿舎への入舎が義務付けられていたので、寄宿率と給費率は連動する。明治17年の法文学部の移転によって二学部の寄宿率は減少し、移転が一年遅れた理学部の寄宿率が増加する。明治18年の移転完了に伴い全員が通学生となった。

東京大学文書館所蔵資料 文部省往復明治十五年分乙号之三、明治十六年分五冊之内丁号、文部省開申請表明治十七年及び十八年の各月の東京大学予備門生徒明細から作成

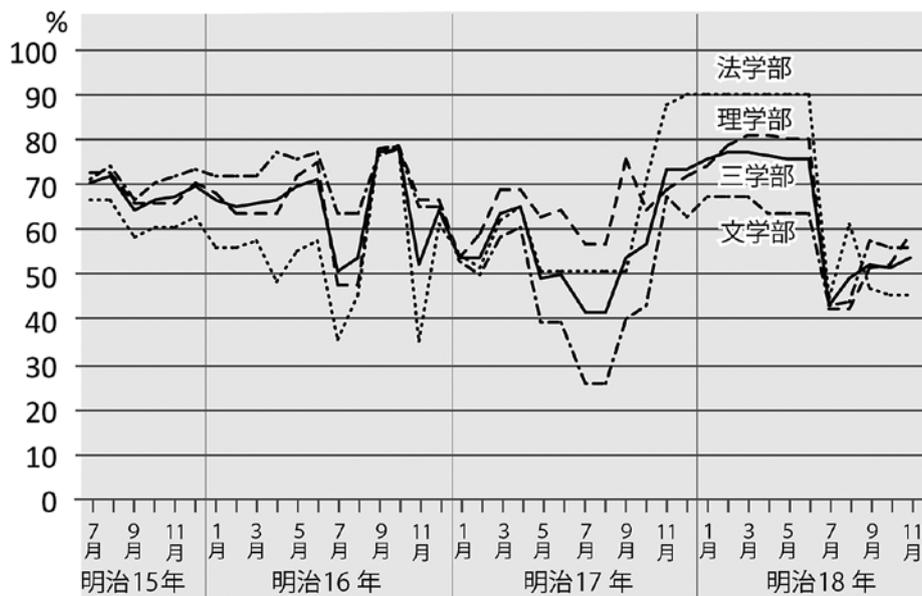


図10 東京大学法理文三学部の給費率

概して東京大学の給費率は高かった。給費率が下がる時期は卒業の時期に重なっているため、実質的な給費率は高いままである。

東京大学文書館所蔵資料 文部省往復明治十五年分乙号之三、明治十六年分五冊之内丁号、文部省開申請表明治十七年及び十八年の各月の東京大学予備門生徒明細から作成

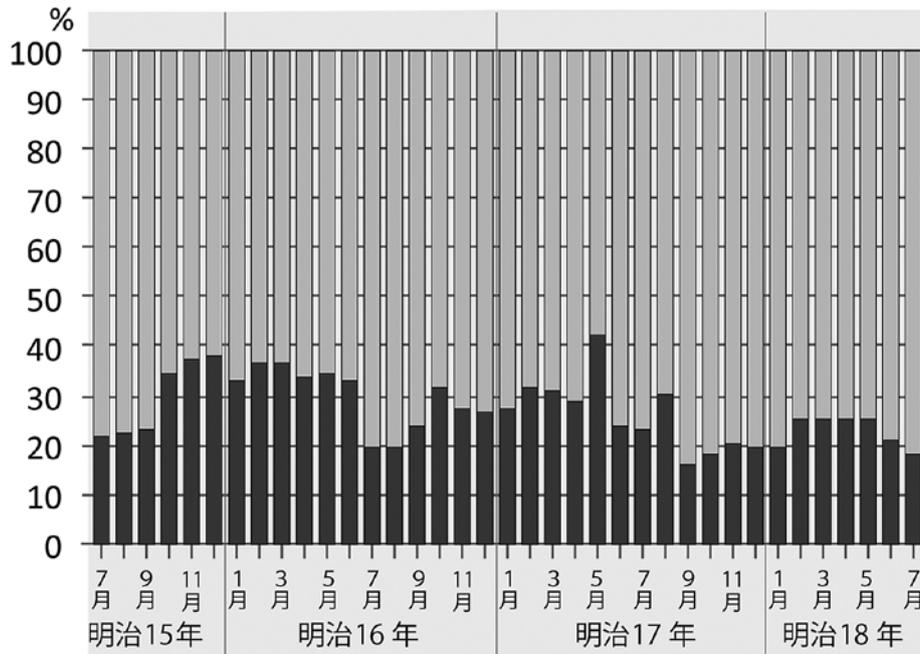


図11 予備門寄宿率

東京大学予備門の寄宿率は東京大学に比べて低かった。予備門ではほぼ全員が自費生であり寄宿の義務はなく、逆に東京大学生の寄宿率から考えて予備門生に割り当てられた寄宿枠は少なかったと考えられる。

東京大学文書館所蔵資料 文部省往復明治十五年分乙号之三、明治十六年分五冊之内丁号、文部省開申諸表明治十七年及び十八年の各月の東京大学予備門生徒明細から作成

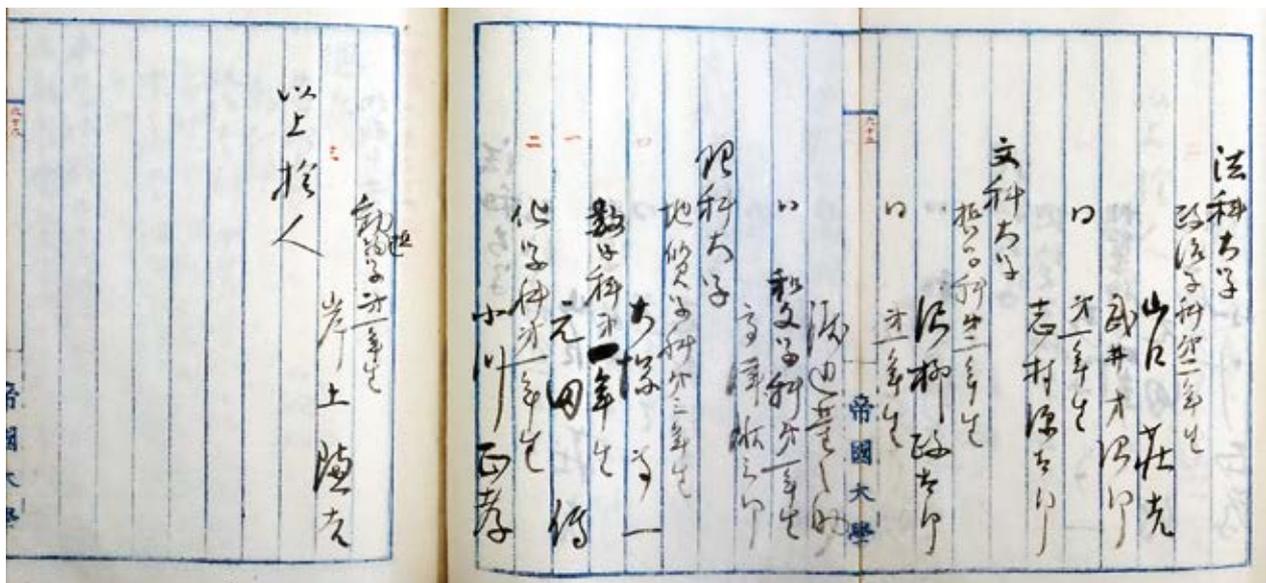


図12 明治19年文部省貸費生一覧

明治19年に選出された文部省貸費生10名の名簿。理科大学3番目に小川の名前が書かれている。

東京大学文書館所蔵資料より複写抜粋



明治二十二年七月卒業學生明細一覽表

學科	姓名	所生年月	籍	氏名
農學	太田正三郎	慶應元九月	石川縣士族	河合十太郎
"	小川正三郎	慶應三六月	東京府士族	元田 博
"	小川正三郎	慶應元十月	茨城縣平民	飯島正之助
"	小川正三郎	元治元九月	兵庫縣平民	池田菊苗
"	小川正三郎	慶應元二月	愛知縣士族	小川正三郎
"	小川正三郎	慶應元三月	大阪府平民	福原昌九
"	小川正三郎	慶應元六月	愛知縣士族	山上 謙吉
"	小川正三郎	文久元二月	岐阜縣士族	三好 學
植物學	小川正三郎	慶應元四月	東京府平民	岡村 金太郎
地質學	小川正三郎	明治二 二月	大阪府平民	金田 權太郎

右本年七月卒業學生之學生明細一覽表、右之表条  
 缺及及即屬夫也  
 明治二十二年六月廿八日 理科 大之内 理科大學  
 帝國大學御中

図15 明治22年7月帝国大学理科大学卒業生名簿  
 理科大学からは10名が卒業した。名簿には卒業生の住所、出身も記載されている。住所から寄宿生の比率が高くないこともわかる。小川の出身地が愛知と誤記されている。  
 東京大学文書館所蔵資料より複写抜粋

記  
 一 七月廿五日大学院入学許可之所高等中  
 等校等、教員欠乏、御任用之、御通達  
 右領収仕書也  
 小川正三郎、石川正三郎  
 留主、大内宣譽  
 明治二十二年七月廿五日  
 帝國大學書記官所中

図16 小川大学院入学許可受領書  
 入学許可と中学校教員への就職についての通知の受領を小川の留主引請人大内宣譽名で帝国大学に提出している。  
 東京大学文書館所蔵資料より複写抜粋

理科三一九号  
 大学院學生  
 元田 博  
 右指導教員、櫻井錠二、小川正三郎  
 右ダイバー、櫻井錠二、山上 謙吉

図17 小川大学院指導教官  
 大学院での小川の指導教官がダイバー、櫻井錠二の2名を届け出ている。  
 東京大学文書館所蔵資料より複写抜粋

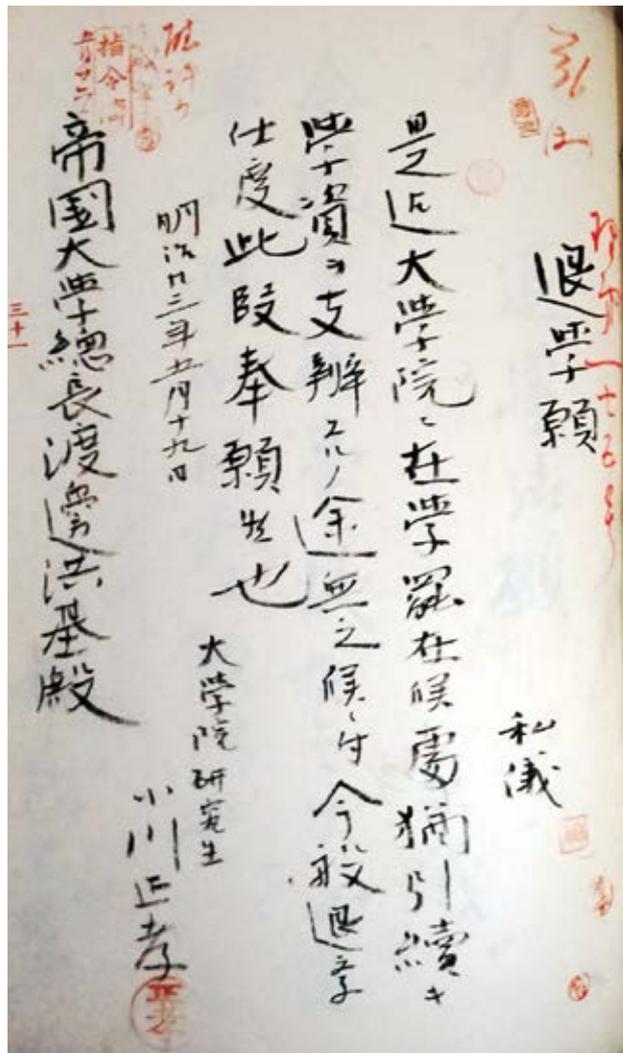


図18 小川大学院退学願  
明治23年5月19日付で帝国大学に提出された小川正孝の退学願。  
東京大学文書館所蔵資料より複写

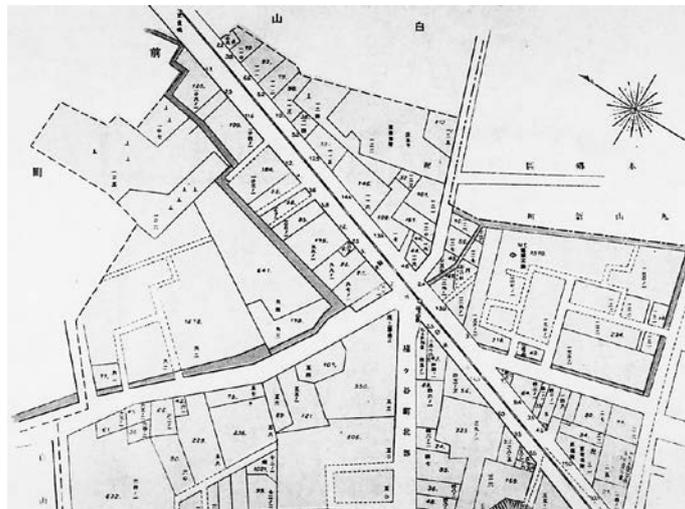


図19 小石川区小川住所周辺  
中央の五叉交差点左(北西)方向に指ヶ谷92から94番地が描かれている。92番地が大内宣譽宅、小川は明治23年4月に93番地から94番地へ転居した。  
大正元年(1912)東京市區調査會編、東京市及接續郡部 地籍地圖 上巻、小石川区指ヶ谷町北部より改変して作成



図 20 大学時代の記念写真

後列右端が小川正孝。左隣が太田正躬。後列左から3番目が正岡子規。前列中央右が西原義任。西原の左が柳原極堂。西原の送別会の記念写真で、小川、子規の2人とも残っていた。

表1 明治初頭の物価

小川が生活していた明治10年代以降を中心とした物価の一覧。

朝日新聞社編 値段史年表 明治・大正・昭和(1988), 新値段の風俗史 明治・大正・昭和(1990)より作成

分類	物品	単位	価格	調査年
食材調理	白米	10kg	82 銭	明治 15 年
	醤油	1 升	9 銭	明治 26 年
	砂糖	1kg	14 銭	明治 30 年
	塩	1kg	7 銭 9 厘	明治 38 年
	みそ	1kg	5 銭	明治 13 年
	鰹節	1 本	10 銭	明治 21 年
	卵	100 匁	10 銭	明治 12 年
	小麦粉	10kg	80 銭	明治 25 年
	牛乳	1 本	3 銭 5 厘	明治 16 年
	牛肉	100 グラム	3 銭	明治 13 年
	豆腐	1 丁	1 銭	明治 41 年
	のり	1 帖 10 枚	10 銭	明治 6 年
	あずき	1 升	4 銭	明治 12 年
外食菓子類	うな重	並 1 杯	20 銭	明治 10 年
	そば	1 杯	1 銭	明治 20 年
	天井	並 1 杯	3 銭	明治 26 年
	あんぱん	1 個	5 厘	明治 7 年
	食パン	1 斤	6 銭	明治 15 年
	まんじゅう	1 個	5 厘	明治 10 年
	いなり寿司	1 個	5 厘	明治 37 年
日用品	鉛筆	1 本	1 厘	明治 20 年
	半紙	1 帖	1 銭	明治 20 年
	足袋	男上級 1 足	12 銭	明治 20 年
	マッチ	並型 1 包	3 銭	明治 9 年
	ジャノメ傘	1 本	80 ~ 90 銭	明治 40 年
	菓飴	7 日分	20 銭	明治 22 年
	炭	1 俵	32 銭	明治 17 年
	そろばん	1 個	30 銭	明治 9 年
地図	1 枚	5 銭	明治 21 年	
嗜好品	コーヒー	1 杯	3 銭	明治 19 年
	茶	100g	6 銭 6 厘	明治 24 年
	日本酒	並等酒 1 升	6 銭 9 厘	明治 14 年
	ビール	大ビン 1 本	16 銭	明治 10 年
	ラムネ	1 本	14 ~ 15 銭	明治 17 年
	焼酎	乙類 1 升	36 銭	明治 40 年
生活関係	家賃	長屋 1 月	8 銭	明治 12 年
	入浴料	1 回	1 銭 2 厘	明治 15 年
	理髪料金	大人 1 人	4 銭	明治 18 年
	電報料金	内地 10 字以内	15 銭	明治 18 年
その他	小学校教員の初任給	月俸	5 円	明治 19 年
	博物館観覧料	休日大人	5 銭	明治 15 年

表2 小川が通った各学校の入学条件と授業料  
 改正共立学校諸規則、東京大學豫備門一覽 本費 自明治十五年至明治十六年、東京大學法理文三學部 一覽 從明治十六年至明治十七年、帝國大學 一覽 從明治十九年至明治二十年より作成

入学時期	明治14年(1881)	明治15年(1882)	明治18年(1885)	明治19年(1886)	明治22年(1889)
学校名	共立学校	東京大学予備門	東京大学理学部	帝国大学理科大学	理科大学大学院
住 所	神田区淡路町	神田区一ツ橋	本郷区	本郷区	本郷区
入学条件 (最下級生)	学業履歴書の提出	14歳以上 入学試験の合格 学業履歴書の提出	第一級入学16歳以上 予備門の卒業 または入学試験合格	高等学校卒業 または 入学試験合格	分科大学卒業生 願書提出
修業年限	2年 (予備門入学をもって 卒業とみなす)	3年	4年	3年	2年
授業料	入学金1円 1円/月 (年額12円)	2円/学期 (年額6円)	4円/学期 (年額12円)	2円50銭/月 7・8月授業料なし (年額25円)	2円50銭/月 7・8月授業料なし (年額25円)
授業料 減免内容		半額の減免	1/4、半額の減額 もしくは全額免除	全額免除	全額免除
減免の条件		貧困	貧困	特待生選抜	給費研究生選抜
寄宿経費			1月6円 授業料、食料、炭薪油等	1月7円50銭 授業料、食料、被服料、 炭薪油等	1月7円50銭 授業料、食料、被服料、 炭薪油等

表3 東京大学予備門の教科  
東京大学豫備門一覽 本龔 自明治十五年至明治十六年より作成

	課目	第一期		第二期		第三期	
第三級 (第一学年)	修身学	論語	週1時間	論語	週1時間	論語	週1時間
	和漢文	通鑑 要正編 作文	週3時間	通鑑 要正編 作文	週3時間	通鑑 要正編 作文	週3時間
	英語学	読法 釈解 書取 綴文及文法	週10時間	読法 釈解 書取 作文及文法	週10時間	読法 釈解 書取 作文及文法	週10時間
	数学	代数幾何	週4時間	代数幾何	週4時間	代数幾何	週4時間
	生物学	生理	週3時間	生理	週3時間	健全学	週3時間
	史学	万国史 国史 要	週5時間	万国史 国史 要	週5時間	万国史 国史 要	週5時間
	画学	自在画法	週2時間	自在画法	週2時間	自在画法	週2時間
第二級 (第二学年)	修身学	論語	週1時間	論語	週1時間	論語	週1時間
	和漢文	通鑑 要正編 作文	週3時間	通鑑 要正編 作文	週3時間	通鑑 要正編 作文	週3時間
	英語学	修辞 作文 釈解 読法及講演	週8時間	修辞 作文 釈解 読法及講演	週8時間	修辞 作文 釈解 読法及講演	週8時間
	数学	代数幾何	週6時間	代数幾何	週6時間	代数幾何	週6時間
	生物学			植物	週3時間	植物	週3時間
	史学	万国史 国史 要	週5時間	万国史 国史 要	週5時間	万国史 国史 要	週5時間
	記簿法	大意	週3時間				
	画学	自在画法	週2時間	自在画法	週2時間	用器画法	週2時間
第一級 (第三学年)	修身学	論語	週2時間	論語	週2時間	論語	週2時間
	和漢文	文章 作文	週3時間	文章 作文	週3時間	文章 作文	週3時間
	英語学	語解 作文 講演	週6時間	語解 作文 講演	週6時間	語解 論文 講演	週6時間
	数学	代数 三角法	週6時間	三角法	週6時間	三角法	週6時間
	物理学	重学 乾電論 水理重学	週3時間	熱論 光論	週3時間	磁力論 電論	週3時間
	化学			無機	週3時間	無機	週3時間
	生物学	動物	週3時間	動物	週3時間		
	理財学					大意	週3時間
	画学	用器画法	週2時間	用器画法	週2時間	用器画法	週2時間

表 4 予備門及び東京大学、帝国大学の進級、退学条件  
 東京大学豫備門一覧 本費 自明治十五年至明治十六年、東京大学法理文三學部 一覧 從明治十六年至明治十七年、帝國大學 一覧 從明治十九年至明治二十年より作成

学校名	東京大学予備門	東京大学法理文三學部	帝国大学
進級判定時期	毎学期及び学年末	学年末	学年末
学年諸課目評点平均	60 点以上必須		
許容される不合格課目数 と課目学年評点最低点	50 点以上 2 課目	50 点以上 1 課目	
	40 点以上 2 課目以下または 50 点以上 3 課目以下 試験結果や学期評点平均により進級する場合もある	40 点以上 2 課目以下 試験結果や学期評点平均により進級する場合もある	
学年諸課目評点平均	40 点以下		
不許可の不合格課目数 と課目学年評点最低点	50 点以下 2 課目以上	50 点以下 2 課目以上	
退学条件			

成績を評点と呼び 100 点満点で採点。  
 課目ごと授業評点（平常の授業受講の評価）と試験評点（試験結果）があり、その平均値が課目の評点となる。  
 課目評点は学期ごとに採点。学年評点は前 2 学期の評点と学年末試験との平均で採点。試験を受けなければ評点はゼロで採点される。  
 評点で課目ごとの合否を判定されるほか、全課目の評点の平均値である諸課目評点平均で学内順位が決まり、学年末の諸課目評点平均が進級等の判定とされる。  
 予備門の学期ごとの進級条件は学年末の条件より範囲が広くはなっているが、退学条件は同じ。

表5 予備門時代の小川同級生の進級比率分析

東京大学豫備門一覽 本覽 自明治十五年至明治十六年, 自明治十六年至明治十七年, 明治十七年十二月(第一學期) 東京大学豫備門前本覽第一, 二, 三級及ヒ第四級生徒試業優劣表, 第一高等學校本部一覽 自明治三十三年至明治三十四年より作成

進級関連	名簿記載数	%
第三級名簿記載者数(明治15年9月) A	157	100
Aのうち 新入生(明治15年)	102	64.9
Aのうち 退学したと思われる者	74	47.1
Aのうち 1年目の落第生徒数	31	19.7
Aのうち 進級生徒数(明治16年)	49	31.2
Aのうち 明治17年に卒業生	32	20.3

表6 小川在籍時代の化学教科

東京大学一から四年次に相当する各年代の化学履修課目. 明治18年, 小川入学当時のデータがなかったため, 明治16~17年の課目を記載した.

東京大学法理文三學部一覽 從明治十六年至明治十七年, 帝國大學一覽 從明治十九年至明治二十年, 明治二十年至明治二十一年, 及び明治二十一年至明治二十二年, 第一高等中学校一覽 從明治二十年至明治二十一年, 從明治二十一年至明治二十二年より作成

明治16~17年					明治19~20年					
学年・履修者		科目	期間	時	学年・履修者		科目	期間	時	
東京大学理学部諸学科	第一学年 柘植千嘉衛 鈴木益夫 山崎壮吉 土井助三郎 小幡文三郎	数学(代数幾何)	1年間	毎週4時	第五号学科(理学志望生) 第一高等中学校本科	第二学年 羽田清八 市岡太次郎 他15名	第1外国語	1年間	毎週4時	
		物理学	半年間	毎週2時			第2外国語	1年間	毎週5時	
		重学大意	2学期	毎週2時			ラテン語	1年間	毎週2時	
		星学大意	1学期	毎週3時			数学	1年間	毎週3時	
		化学(無機 実験)	1年間	毎週4時			化学	1年間	毎週3時	
		金石学大意	半年間	毎週2時			天文	1年間	毎週1時	
		地質学大意	半年間	毎週2時			哲学	1年間	毎週3時	
		図学	1年間	毎週2時			画学	1年間	毎週3時	
		論理学	半年間	毎週2時			力学	1年間	毎週2時	
		英語	1年間	毎週4時			測量	1年間	毎週3時	
		東京大学理学部化学科	第二学年 受講者なし	分析化学(検質分析)			1年間	毎週12時	帝国大学理科大学化学科	第一学年 池田菊苗 小川正孝
有機化学	1年間			毎週2時	力学	1年間	毎週3時			
物理学	1年間			毎週4時	物理学	1年間	毎週3時			
金石学	1年間			毎週2時	化学実験					
吹管分析	1年間			毎週3時	鈹物学及び実験	1年間	毎週3時			
英語	1年間			毎週2時	ドイツ語	1年間	毎週3時			
ドイツ語	1年間			毎週2時						
第三学年 村瀬光圀 松井元次郎	製造化学		1年間	毎週3時	第二学年 受講者なし	高等物理学	1年間	毎週5時		
	冶金学		1年間	毎週4時			化学	1年間		毎週6時
	物理学		1年間	毎週3時			生理化学	1年間		毎週3時
	分析化学(定量分析)		1年間	毎週12時			物理学実験	1年間		毎週3回午後
第四学年	製造化学実験	1年間	毎週4時	化学実験	ドイツ語	1年間	毎週3時			
	ドイツ語	1年間	毎週3時							
純正化学	吉武栄之進 高島勝次郎	化学理論	1年間	毎週1時	第三学年 受講者なし	理論及び物理化学	1年間	毎週2時		
		有機体研究	1年間	毎週1時			光線化学	第1期	毎週1回午後	
		製造化学	1年間	毎週3時				バクテリア学	第1期	毎週1回午後
		物理学	1年間	毎週2時			化学実験			
		純正化学実験	1年間	毎週19時						
		試金術	2学期	毎週4時						
		卒業論文(邦文漢文若くは英文)								
応用化学	増島文次郎 横地石太郎 安藤格	製造化学	1年間	毎週3時						
		製造化学実験	1年間	毎週16時						
		応用重学	1年間	毎週3時						
		試金術	2学期	毎週4時						
		機械図	1年間	毎週2時						
		卒業論文(邦文漢文若くは英文)								

明治 20 ～ 21 年				明治 21 ～ 22 年			
学年・履修者	科目	期間	時	学年・履修者	科目	期間	時
第二学年	第 1 外国語 第 2 外国語 ラテン語 数学 化学 天文 哲学 画学 力学	1 年間 1 年間 1 年間 1 年間 1 年間 1 年間 1 年間 1 年間 1 年間	毎週 4 時 毎週 5 時 毎週 2 時 毎週 3 時 毎週 3 時 毎週 1 時 毎週 3 時 毎週 3 時 毎週 2 時	第二学年 太田久太郎 中村清二 大幸勇吉 山上萬次郎 藤井健次郎 太田達人	第 1 外国語 第 2 外国語 ラテン語 数学 化学 天文 哲学 画学 力学	1 年間 1 年間 1 年間 1 年間 1 年間 1 年間 1 年間 1 年間 1 年間	毎週 4 時 毎週 5 時 毎週 2 時 毎週 3 時 毎週 3 時 毎週 1 時 毎週 3 時 毎週 3 時 毎週 2 時
第一学年 羽田清八 市岡太次郎 池彌太郎	微分積分 力学初歩 高等物理学 化学実験 分析化学 鉱物学 鉱物実験 ドイツ語	1 年間 1 年間 第 2 期下 第 3 期 第 1 期 1 年間 1 年間 1 年間	毎週 3 時 毎週 3 時乃至 4 時 毎週 3 時 毎週 2 時 毎週 2 時 毎週 2 時 毎週 3 時	第一学年 三原義比	微分積分 力学初歩 高等物理学 無機化学 生理化学 及び実験 化学実験 ドイツ語	1 年間 1 年間 第 2 期下第 3 期 1 年間 1 年間 1 年間	毎週 3 時 毎週 3 時乃至 4 時 毎週 3 時 毎週 3 時 毎週 3 時 毎週 3 時
第二学年 池田菊苗 小川正孝	無機化学 有機化学 生理化学及び実験 高等物理学 化学実験 物理学実験 ドイツ語	1 年間 1 年間 1 年間 1 年間 1 年間 1 年間 1 年間	毎週 3 時 毎週 3 時 毎週 3 時 毎週 5 時 毎週 3 回午後 毎週 3 時	第二学年 羽田清八 市岡太次郎 池彌太郎	高等物理学 物理学実験 無機化学 有機化学 化学実験 ドイツ語	第 1 期第 2 期 1 年間 1 年間 1 年間 1 年間	毎週 5 時 毎週 3 回午後 毎週 3 時 毎週 4 時 毎週 3 時
第三学年 受講者なし	化学理論の歴史 理論及び物理化学 光線化学 光線化学実験 化学実験 バクテリア学	第 1 期 第 2 期第 3 期 第 1 期 第 1 期 第 3 期	毎週 2 時 毎週 2 時 毎週 2 時 毎週 1 回午後 毎週 6 時	第三学年 池田菊苗 小川正孝	化学理論の歴史 理論及び物理化学 光線化学実験 化学実験	第 1 期 第 2 期第 3 期 第 1 期	毎週 2 時 毎週 2 時 毎週 1 回午後

表7 明治19年の帝国大学奨学金一覧  
 明治19年、帝国大学開学時に募集された奨学金の一覧。  
 帝國大學一覧 從明治十九年至明治二十年より作成

種別	条件	募集大学学科	定員
文科大学賃費生	特別保護を要する学科 卒業後の就職条件の承諾	文科大学	若干名
理科大学賃費生	特別保護を要する学科 卒業後の就職条件の承諾	理科大学	若干名
文部省賃費	卒業後、中学校もしくは師範学校教員の職に従事	法科大学政治学科 文科大学 理科大学	10名
司法省賃費	卒業後、司法の職に従事	法科大学法律学科	30名
鉄道局賃費	卒業後、鉄道局の事業に従事	工科大学土木工学科 機械工学科	7名 3名
内務省土木局賃費	卒業後、土木局の事業に従事	工科大学土木工学科	毎級10名
三菱社奨学賃費	なし 卒業後の返済は帝国大学に行い、その返済金が次代の奨学生への賃費金原資となる。	法科大学政治学科 理財学科 工科大学 文科大学 理科大学	10名
古河市兵衛賃費	卒業後、古河市兵衛の事業に従事する	工科大学採鉱冶金学科	6名
藤田組賃費	卒業後、大坂藤田組の事業に従事	工科大学採鉱学科 土木工学科 造船学科 応用化学科	2名 1名 1名 1名
大倉組賃費	卒業後、大倉組の事業に従事	工科大学土木工学科 造家学科	1名 1名
東京電気燈会社賃費	卒業後、東京電気燈会社の事業に従事	工科大学電気工学科	1名

表 8 小川の関係する奨学金制度まとめ  
 各学校の奨学金制度のうち小川が需給対象となったものをまとめた。  
 東京大学豫備門一覧 本費 自明治十六年至明治十七年、東京大学法理文三學部一覧 從明治十六年至明治十七年、帝國大學一覧 從明治十九年至明治二十年より作成

学 校	東京大学理学部			帝国大学	
	東京大学予備門	給 費	補助給費	理科大学賃費	文部省賃費
奨学金名	東京大学予備門	明治 16 年 2 月まで	明治 16 年 3 月から	明治 19 年 12 月から	
制度時期	明治 16 年 3 月から				
給費条件	奨業最優等 品行方正 奨業優等で品行方正、将来成業の目的がある 貧困 寄宿舎入舎	明治 16 年 2 月以前の給費生又は学力優良で品行方正、将来成業の目的がある 貧困 寄宿舎入舎 卒業後の就職条件の承諾	奨業最優等生 品行方正	特別保護を要する学科 学力優等 品行方正 奨業支弁困難者 卒業後の就職条件の承諾	特別保護を要する学科 学力優等 品行方正 奨業支弁困難者 卒業後の就職条件の承諾
給費額	一月 5 円以内	一月 5 円以内	一月 6 円以内	一月 7 円 50 銭 (7, 8 月は 5 円) 年額 85 円以内	一月 7 円 50 銭 (7, 8 月は 5 円) 年額 85 円以内
給費人数	4 名～ 11 名	上限不明 (130 名程度給費実績あり)	上限不明 (100 名程度給費実績あり)	若干名	一年ごと 10 名選定 (計 30 名)
返還条件等	卒業後 3 年目より 5 円以上返還	卒業又は退学の日から給費金を受けた年数と等しい期限内は文部省もしくは総務の命があればその職務に就く		1 年 6 分の利子をつけて賃費期間と同じ年数で返還 賃費を受けた年数と同じ期間を賃費者の示命の職務に就く	1 年 6 分の利子をつけて賃費期間と同じ年数で返還 卒業後に中学校又は師範学校の教員に就職
その他	予備門では生徒のほぼ全員が自費生	明治 16 年 3 月から条件を満たした者のみ補助給費に移行			

表9 小川の就職スケジュール  
 大学院退学と就職に関する往復書簡の一例。免許交付前の着任や就職後に就職の問い合わせ回答があるなど、小川の就職が突然決まり混乱の中事務処理を行ったことがうかがえる。  
 静中静高百年史上巻，“個人願ニ依リ大學院退学ノ件。”大学院学生関係書類 明治二十三、二十四大学院学生関係，“理学士小川正孝教員検定願。”文部省往復 明治二十三年，“小川正孝静岡尋常中学校へ就職願ノ件。”明治二十三年学士養成関係，履歴書，静岡県立静岡中学校一覽より作成

日付	出来事	資料
明治23年 3月18日	静岡尋常中学校の理科担当秋山保教諭が退職	静中静高百年史上巻
5月19日	小川退学届提出	“個人願ニ依リ大學院退学ノ件。”大学院学生関係書類 明治二十三、二十四大学院学生関係
5月26日	教員免許検定願を文部省へ提出	“理学士小川正孝教員検定願。”文部省往復 明治二十三年
5月26日	小川就職ノ儀ニ伺を帝国大学に提出	“小川正孝静岡尋常中学校へ就職願ノ件。”明治二十三年学士養成関係
5月26日	帝国大学が文部省に小川の中学就職を問合せ	“小川正孝静岡尋常中学校へ就職願ノ件。”明治二十三年学士養成関係
日付なし	文部省検定委員から履歴書送付の通達	“理学士小川正孝教員検定願。”文部省往復 明治二十三年
5月30日	帝国大学から小川の履歴書送付と検定料の報告	“理学士小川正孝教員検定願。”文部省往復 明治二十三年
6月2日	静岡県尋常中学校着任	履歴書，静岡県立静岡中学校一覽
6月13日	尋常師範学校尋常中学校高等女学校教員免許受領	履歴書
6月24日	文部省総務局から小川の就職が差し支えないことを帝国大学へ通知	“小川正孝静岡尋常中学校へ就職願ノ件。”明治二十三年学士養成関係
7月5日	帝国大学から小川へ静岡中学就職が差し支えないことを通知	“小川正孝静岡尋常中学校へ就職願ノ件。”明治二十三年学士養成関係
7月8日	小川御請書の受領を帝大書記官室へ送付	“小川正孝静岡尋常中学校へ就職願ノ件。”明治二十三年学士養成関係